大道芸人たち
Artistas callejeros
CHAPTER 3

Author : Yu Yaotome
Copyright@ 2012 Yu Yaotome

目次

東京、到着
千葉、墓参り
東京、園城家にて
東京、ワインを飲みながら
厳島、海つ路
京都、翠嵐
出雲、エレジー
東京、積乱雲

東京、到着

「え。パゴダとか見えないんだ」
レネの成田空港への感想に稔は白い目を向けた。
「見えるわけないだろ」
蝶子は相手にすらしなかった。
「いいから、ガイジンはあっちに並んで。私たちはこっちだから」
「ガイジンってなんだ？」
ヴィルが訊いた。
「外国人ってことだよ。ほんの少し侮った感じだけど、よく言われると思うから覚悟しとけ」
稔が言った。二人は肩をすくめて大人しく外国人の入国審査の列に並んだ。
　あっという間に入国審査の終わった稔と蝶子は荷物が来るのを待っていた。後からやってきたヴィルとレネは少し憤慨していた。
「指紋を採られて、目の写真も撮られた」
「そんな審査があるなんて聞いていなかったですよ」
蝶子と稔は外国人審査にそんなものがある事を知らなかったし、だいたいそれが憤慨する事とは思えなかったので、顔を見合わせた。
「イヤなの？」
「まるで犯罪者扱いじゃないですか」
「何もしなければ、問題ないわよ」
蝶子はあっさりと流した。二人ともまだぶつぶつ言っていたが、日本人二人は聞いていなかった。
「とりあえず真耶に連絡してみましょう。いつなら会いにいってもいいか」
「そうだな。そっちはまかせる」
「ヤスはすぐにお家に戻るの？　連絡先を真耶の所にしておけばいいわよね」
「まず、園城の都合を聞いて、それから決めるよ。正直いってどの面さげて帰っていのか、先に電話すべきか、まだ決心ついていないんだ。お蝶、お前は実家には帰らないのか？」
「帰らないわ」
荷物の引き取りを頼んで、蝶子は公衆電話に歩み寄った。
「蝶子なの？　どこからかけているの？」
「今、成田空港に着いたの。一ヶ月滞在するんだけれど、いつなら会える？　それにあわせて予定立てるから」
「何言っているのよ。今夜はどこに泊まる予定なの？決まっていないなら、今すぐここに来なさいよ。東京にいる時はずっとうちに泊まって」
「だって、私一人じゃないし……」
「だから四人まとめてくればいいでしょ。そのくらいの空間はうちにあるわよ」
蝶子は、手招きをして荷物を持った三人を呼んだ。
「真耶が泊めてくれるって言っているんだけど、反対はいる？」
もちろんいなかった。
「じゃ、お言葉に甘える事にするわ。リムジンバスで行くとしたらどこが一番近い？」
「赤坂のニューオータニにしてそこから電話をちょうだい。車で迎えに行くから」

「赤坂のニューオータニの近く……」
稔の目が宙を泳いだ。レネが訊いた。
「何か問題でも？」
「とんでもない高級住宅地ってことだよ。めったに泊まれるような所じゃないぜ」

「おい。新東京空港って言わなかったか？」
ヴィルが訊いた。バスに乗ってから一時間以上が経っていた。
「成田か？　そうだけど」
稔は、絶対文句言うと思っていた、と腹の内でぼやきながら答えた。
「まだ着かないのか？」
「成田は、実は東京じゃないのよ。まだしばらくは着かないわよ。だから寝ればよかったのに、ブラン・ベックみたいに。ジェットラグは大丈夫なの？」
「飛行機で寝れたのか？」
蝶子と稔の二人に心配されて、ヴィルは首を傾げた。
「少しはな。何が問題なんだ？」
「八時間の時差を克服するには初日が一番大切なの。今から、夜になるまでもう寝ちゃダメよ。午後あたりにすごく眠くなると思うけど」
「そうしないと？」
「時差ぼけが悪化するんだ。昼間に眠くて、夜は眠れない日々が続くんだよ」
　蝶子も稔も日本に帰るのは久しぶりだった。周りの光景に興奮しているのがわかる。

　ヴィルはどこまでも途切れなく続くビルと家とを眺めていた。まったくわからない言葉の並んだ看板。ふと、未だに持っている葉書の事を考えた。今から会いに行こうとしている園城真耶から蝶子にあてた葉書。Artistas callejeros に加わる事にしたのは、あの葉書で蝶子の名前を知ったからだった。家を出る奇しくもその日に届いた葉書。この文字のように不可解な運命。夜は眠れない日々が続く。それはヨーロッパにいても同じだ。ヴィルは自嘲した。

「起きろ、ブラン・ベック。着いたぞ」
稔に叩き起こされて、寝ぼけたレネは間違ってメガネの上から目をこすった。
「やだ。もう真耶がいるじゃない！」
蝶子の言葉にレネは仰天して飛び上がった。噂のマドモワゼル・マヤにみっともない顔は見せられない。
　真耶はあまりに想像通りな四人組に微笑んだ。蝶子は腰まであった髪がセミロングになった以外は、ザルツブルグで会った時からほとんど変わっていなかった。稔は大学時代からは髪型も服装もかなり変わっていたが、朗らかで楽天的な様子は昔のままだった。その横に、蝶子曰くブラン・ベックのそわそわした手足のひょろ長いフランス人と、無表情で必要もなく身構えて見える金髪のドイツ人。四人は大道芸人のようには見えなかった。唯一それらしいといえば、荷物がやけに少ない事だった。これは彼らの旅支度ではなく、全財産なのだ。人間はこれだけの物があれば生きていけるのだ。一年間も。そう思うと自分がどれだけたくさんの物を所有しているのかと、真耶は思う。

「ごめんね、真耶。突然こんなに大勢で押し掛ける事になっちゃって。お父様たち怒っていない？」
「今、アメリカだから。二週間したら帰ってくるからそのときに引き合わせるわよ。ねぇ。あなたたちはね。この一年間、私を疑問の固まりにしたのよ。話を聞きたくて手ぐすね引いて待っていたの。一日程度のおざなりな訪問で済まされてなるものですか」
　運転席の真耶と助手席の蝶子が話しているのを、稔は小さな声で二人に通訳してやった。
「あら、ごめんなさい。英語で話せば全員に通じるのね？」
「そうなんだ。俺たちの公用語は一応英語になっている」
「じゃあ、私も英語で話すわね。今日は来れないけれど、拓人にも言っておく」
「真耶、あなた今でも結城さんにべったりなの？」
「なによ、その言い方。私たちは親戚だし、いい音楽のパートナーなの。彼、いい音を出すようになったの。びっくりするわよ」
「楽しみだわ」
　蝶子は窓の外のビル街を見ながら言った。赤坂の風景を見ながら、真耶と結城拓人の話をするなんて、夢にも思わなかったわね。自分の国にいるのに夢の中にいるみたいだわ。
　蝶子と真耶、そして稔は同じ音大のソルフェージュのクラスメイトだった。ヴィオラ専攻だった真耶は卒業後日本でデビューし、海外でも様々な賞を受賞して華々しい活躍をしていた。真耶のはとこにあたる結城拓人は同じ音大の一年上級生で、最年少でショパンコンクールで優勝したかつての天才少年として有名なピアニストだった。音大ではプレイボーイとしても有名だったが、真耶にだけは頭が上がらなかったのを稔も蝶子もよく憶えていた。二人とも著名な音楽家一族の出で、裕福な上、デビューの機会にも恵まれていた。音大に進むことも許されず、苦学をした蝶子は高い授業料とレッスン代を捻出するためにアルバイトに明け暮れていたので、真耶や拓人と親交を深めるような機会はなかった。それにも関わらず、真耶と蝶子はお互いを認め合っていたし、ザルツブルグで再会した後に奇妙な成り行きで蝶子が真耶に返信不可能な葉書を送りつけるようになり、不思議な友情が育ったのだった。
「ねえ、真耶。あなたヤスを憶えていた？」
蝶子はずっと抱えていた疑問をぶつけてみた。
「安田くん？　もちろんよ。ウルトラ優秀だったじゃない。最初の試験で、邦楽科なのにトップをとられたんで、ものすごく悔しかったの。次の時に一位を奪回するのに必死になったのよ」
「園城が必死になるなんてこともあるんだな。なにもかも余裕でやっているのかと思っていた」
稔は笑った。
「それで？　どういうことなのか、説明して頂戴。なぜ蝶子と安田くんが一緒に旅をしているわけ？　エッシェンドルフ教授との結婚はどうなったのよ」
「ストップ。そんな話、車でなんか出来ないわ。その話が聞きたいならまず酒屋に行かなくちゃ」
「なぜ？」
「酔っぱらわないと話せないもの。で、このメンバーが酔っぱらうと

なると……。真耶のお父様の高級ワイン、みんな空にするわけにいかないでしょ？」

だが夕食が終わると、稔とレネは音を上げて速攻で寝室に行ってしまった。居間で赤ワインを傾けているのは蝶子と真耶とヴィルだけだった。

「ねえ、蝶子。今度こそはぐらかさないで話してよ」

「ちょっと待って。テデスコ、あなたまだ寝ないの」

「ここの美味い白ワインを飲み過ぎたから眠れない。俺に聴かれたくないなら日本語で話せ」

「そんな事はしないわ。ねえ、真耶。私たちにはルールがあるの。お互いのわからない言葉では話をしない。訊かれた事には絶対に嘘を言わない。話したくない事には答えないけれどそのことを突っ込んだりしない。わかる？」

蝶子のドイツ語に、真耶もドイツ語で答えた。

「わかったわ。ヴィルさんの前で話せる範囲でいいから説明して頂戴」

蝶子は少し黙っていたが、やがてヴィルにピアノを示して言った。

「聴いていていいから、そのかわり何か自己憐憫に浸れるようなロマンチックな曲を弾いてよ」

真耶は、ヴィルがピアノを弾けるとは聞いていなかったので少し驚いた。ヴィルは黙ってピアノの前に座ると、邪魔にならないような音量でフォーレの『ノクターン　第四番』を弾き出した。真耶は目を丸くした。何よ、私や蝶子よりずっと上手じゃない。全然聞いていなかったわ。蝶子は真耶の表情を見て口の端で笑った。それからワイングラスに映った自分を睨みつけて、吐き出すように言った。

「私ね、ずっと教授から自由になりたかったの。本当は婚約なんかしたくなかった。それどころか、師弟の壁を越えた関係にもなりたくなかった。でも、それがずっと言えなかったの。言ったら、もうフルートが続けられなくなる、そう思っていたから。ものすごい支配だったわ。フルートの教えも、生活の全ても、それに体も。息が出来ないほどに、反発など考えられないほどに」

真耶は口を挟む事も出来ないで蝶子を見つめていた。エッシェンドルフ教授のことは、拓人から聞いた事がある。めったに女の弟子はとらないが、目に叶った女の弟子には、必ずといっていいほど手を出す。そして、いつもの遊びのつもりだった教授が、蝶子には本氣になってしまった。名声、実力を持つ絶対権力者に絡めとられていく蝶子の恐怖が伝わってきた。

「ねえ、真耶。私はずっとしかたのない事だと思っていたの。フルートを吹き続けるためには、自分の納得のいく音楽を続けていくためには、他に道はないんだって。それでも構わないはずだって。私には帰る所も待ってくれる人もないから。あなたにザルツブルグで会った時にも、そう思って諦めていたの」

「でも、逃げる事にしたのね」

「ええ。ミュンヘンに戻ったらね、ある女性が亡くなっていた。三十年以上、教授のことを待っていらした方が。それで、私は我に返ったの。ここにはいられないって。はっきりわかったんだもの。私は一度だって教授を愛した事がなかった。それどころかいつも憎んでいたんだって。それでどうして結婚できる？　どこに行こうとか、これから何をしようとか何も考えなかった。ただ、教授から逃れたかった」

ヴィルは黙って弾き続けた。蝶子の横顔が東京の独特の青白い街頭に浮かび上がっている。蝶子は真耶に話しているようで、ヴィルに語っているのだった。バイエルンなまりのドイツ語で。ヴィルは蝶子が語っている恐るべき支配を誰よりもよく知っている。二人は同じ男から同じ理由で逃げ出してきたのだ。

「コルシカ島で二週間くらいぼうっとしていたの。あそこから逃げ出した時点で、私のキャリアは終わってしまった。どこにも行くところがなかった。これからどうすればいいのかもわからなかった。フルートを吹く以外の人生なんか考えた事もなかった。でも、実家には帰れなかった。私にはまだ馬鹿げたプライドが残っていたから。リボルノに向かうフェリーの中で、氣がついたら泣きながらフルートを吹いていた。そうしたら、たまたまそこにいたヤスが私を見つけたのよ。彼は当時からもう立派な大道芸人だった。それで仲間にしてって頼んだの」

蝶子は箱を開けてフルートを取り出した。それからヴィルに伴奏を頼んで、フォーレの『シシリエンヌ』を吹いた。コルシカフェリーで吹いた曲だ。あの時は苦しくてしかたなかったのに、今はこれほどに穏やかな心で吹く事が出来る。これから行くところはわからない。どうなっていくのかもわからない。でも、私には帰る場所と思える仲間がいる。何があろうと、観客や喝采などなくとも、フルートを吹き続ける。

真耶には蝶子の決断を完全に理解する事は出来なかった。真耶にとって音楽は町中の路上で小銭を稼ぐためのものではなかった。もっと神聖な存在だった。けれど、同じ至高の存在を目指したはずなのに、恩師に望まぬ未来を強制された蝶子の苦しみはわかった。

真耶は自分が恵まれた環境にいる事をよくわかっていた。現在の自分のキャリアはその環境なしには実現し得なかった事も知っていた。蝶子は両親に受験も留学も許してもらえなかった。必死で音楽のために闘うしかなかった。その血のにじむ努力と不屈の意志が実を結び、今の蝶子は音楽の神の恩寵を身につけている。この演奏を聴けばわかる。それでも、彼女は、そしてこの謎のドイツ人は、彼らにふさわしい立派なコンサートホールではなく、街から街へと流れながら自由を謳歌して生きる事の方を望んでいる。

音楽の神に仕える方法はたった一つではないのだ。真耶がこの二人の演奏からおぼろげに理解できるのはそれだけだった。

翌朝、稔は台東区にある生家に行くといって、早くに真耶の屋敷を出た。残りの三人が起き出してくるまでヴィオラを弾いていた真耶は、この日はオフだったので、東京観光につきあうと申し出た。四人は、皇居の散策をして、それから帝国ホテルでお茶をすることにした。

「真耶さんは本当に大輪の薔薇のようだ」

四人で歩いている時に、レネは真剣に言った。蝶子は頷いた。色は暖かいオレンジ色。華やかでいて心が和む。これほど全てに恵まれた女性があるだろうか。蝶子は大学時代に感じた深いコンプレックスを思い出して自嘲した。あの時は真耶に誇れるものなんか何も持っていなかった。たった一つだけ、音楽を学びたいという情熱だけは真耶に匹敵すると自負していた。けれどそれだけだった。アルバイトに明け暮れ、友だちもなかった。いつになったらフルートだけの事を考えて生

きられるようになるのだろうと焦りながら、真耶を妬ましくすら思っていた。
　蝶子は今でも真耶に匹敵する音楽家にはなっていなかった。だが、それを卑下する心ももうどこにもなかった。蝶子は自分のしたい事をして生きられるようになり、真耶はうらやむべき相手ではなく蝶子の親しい友人になっていた。
「過分な評価をありがとう。でも、ここにもきれいな女性がいるのよ。蝶子は何の花？」
真耶が微笑んで訊くとレネは少し考えた。
「アヤメかな？　それとも百合？」
真耶はヴィルを見た。ヴィルは真耶と蝶子に答えを期待されて困った顔をした。やがて言った。
「ライラック」
三人は意外だという顔をした。
「あの薄紫のかわいい花？」
「いや、あの色ではなくて、濃い紫の」
レネは頷いた。春から初夏に向かう一番心浮き立つ時期の、香り高い花。青空に向かって誇り高く咲くその濃紫は高潔で美しい。さすがテデスコはよく見ているなと思った。
　帝国ホテルのカフェではデザートの食べ放題をやっていた。甘いものに目のないレネが素通り出来るはずがない。蝶子も久しぶりだったのではしゃいだ。
「日本のデザートは小さいからいろいろ楽しめるのよね。味もしつこくないし」
　そうやって皿にかなりの量のケーキを載せて戻ってくると、真耶はたった二つ、ヴィルにいたってはテーブルを離れる事すらせず、コーヒーだけを飲んでいた。
　二人が話していて、ヴィルが笑っているのを見た。蝶子が今までほとんど見た事のない、明るくてさわやかな笑顔だった。皮肉を言い合う時以外はほとんど感情の変化を見せないヴィルに蝶子は慣れていた。傍から見ると同じように見える表情でも、わずかな動きで機嫌がいいのか、むっとしているのか読み取る事が出来た。でも、その笑顔は反則だわ。出来るんなら、ちゃんと表情を見せなさいよ。それとも私たちには出し惜しみってわけ？　蝶子は思った。停まっている蝶子を見て、ヴィルが不思議そうな顔をしたので、蝶子は我に返ってテーブルに歩み寄った。
「真耶、それだけしか食べないの？」
「いま太ったり、吹き出物作ったりするわけにいかないのよ。来週、また撮影があるの」
「撮影って、何の？」
「化粧品のＣＭよ。数年前から出ているの」
「それはそれは。でも、これを前にして食べられないなんて拷問じゃない？」
「ちょっとね。でも、あなたたちは日本のデザートはそんなにしょっちゅう食べられないんだから悔いのないように食べておきなさいよ」
真耶は優しく笑った。
「このコーヒー、薄いな」

ヴィルが言った。ヨーロッパのコーヒーはエスプレッソ式のものが主流なのでドリップ式の日本のコーヒーはお湯で薄めたように感じる。確かに蝶子も久しぶりに日本のコーヒーを飲んで薄く感じた。日本にいた時は一度もそんな事を感じた記憶がない。
「エスプレッソ、頼みましょうか？」
真耶が親切に言うのを蝶子が止めた。
「そんなに面倒見なくてもいいのよ。日本人と違って遠慮って習慣がないので、欲しければ勝手に頼むだろうし」
「よくわかっているな」
ヴィルは文句を言いつつ、その薄いコーヒーを飲み干し、ウェイターがお替わりを注ぎにきても断らなかった。恭しくコーヒーを注ぐそのサービスが面白いらしい。
少し遅れてレネが嬉しそうに席に戻って来た。何種類ものケーキ、トルテ、ババロア、ゼリー、その他、隠れて見えないけれどとんでもない量の、蝶子の三倍は盛ったデザートの山を見て真耶は言葉を失った。
「そんなに食べきれるわけ？」
蝶子も疑わしげに訊いた。
「だって、こんなにきれいで美味しそうなのが並んでいるんですよ。素通りできなくて。食べきれなかったらテデスコに助けてもらいますから」
それを聞いて真耶はヴィルを見た。
「助けられるの？　甘いものは食べない人なのかと思ったわ」
「まったく食べないわけじゃない。わざわざ取りに行くほどじゃないが、おこぼれくらいなら食べるよ」
「ふ～ん。じゃあ、これあげる」
蝶子は小さなエクレアの一つ残った皿をヴィルに差し出した。久しぶりだったのでたくさん取ってしまったが、蝶子はもう甘いものに飽きたのだ。ヴィルは軽く非難している印に片眉を上げると、皿を引き寄せた。そして蝶子の手からフォークを取り上げると黙ってエクレアを片付けた。真耶はその様子を見ていた。ものすごく自然だったという事は、この人たち、普段からこういう事をしているんだわ。真耶にはフォークを共有するほど近い関係の男性はいなかった。はとこの結城拓人とは、子供の頃から双子のように育ちいつも一緒だった。また真耶には何人もつきあった男性がいた。しかし、拓人にも恋人たちにも黙ってフォークを取り上げられたら抗議するだろう。
レネの方は、ヴィルに助けてもらう必要はなかった。全部食べたのは見事だったが、レネ本人だけでなく見ていた他の三人も甘いものは当分けっこうと思った。
帰りも堀の近くを歩いた。舞い上がったレネが真耶に張り付いて必死で話しかけているので、蝶子とヴィルは少し遅れて歩いていた。蝶子には懐かしい東京のアスファルトの道、ヴィルにはまったく異国の不思議な光景だった。二人とも昨夜の事はまったく話さなかった。蝶子は今エッシェンドルフ教授の事は話したくなかったし、ヴィルも同じだった。
「少しは眠れたの？」
蝶子は静かにドイツ語で訊いた。ヴィルもドイツ語で答えた。

「ああ、あんなに深く眠った事は、ここ数年なかったかもしれない。朝、レネに起こされたときもしばらく日本にいる事を思い出せなかった」
　昨夜遅くまで起きていたおかげでヴィルはもっとも大きい苦しみから解放された。父親に嫉妬する必要はもうなくなったのだ。
「日本は氣に入った？」
「日本そのものはまだほとんど見ていないからなんともいえないが、あんたの友人は氣に入ったよ」
「わかっているわ。さっき、とっても楽しそうだったもの。期待しないように言っておくけれど、あんなにきれいで才能のある人は、日本中のどこに行っても、他には見つからないわよ」
「心配するな。日本に女を探しにきたわけじゃない」
　蝶子はいつものような減らず口を叩かなかった。ヴィルは蝶子が誤解していると思った。けれど、それを口にすれば抑え続けている心が表に出てしまう。それを蝶子が好まないのをヴィルはよくわかっていた。彼はあきらめて別の感想を口にした。
「不思議だな。あんたにはどんなに残酷で冷徹でも、どこかしなやかで細やかな機微があると思っていた。それはあんたの友だちにもある。それが日本人女の特徴なのかもしれないな」
「それ、誉めているんだか貶しているんだかわからない言い草ね」
「誉めているんだよ」

千葉、墓参り

　浅草に行ったのに、どうしても家には行けなかった。ようやくみつけた公衆電話ボックスにも入ったが、電話ができなかった。稔は己の不甲斐なさに毒づきながら、ボックスを出た。
　それから電車に乗って千葉に向かった。『新堂のじいちゃん』に会うためだった。
　浄土真宗のその寺は、人里から少し離れた緑豊かな所にあった。新堂沢永和尚は九十を超したようには見えない矍鑠たる老人で、健康のために酒と女は欠かせないと豪語する愉快な男だった。実際には稔とは血縁関係はなかった。和尚の亡くなった妻が、稔の祖母の姉だったのだ。その縁で、安田家の法事はこの千葉の寺で行われた。三ヶ月前になくなった父親の墓も、この寺にあるはずだった。
稔は『新堂のじいちゃん』が大好きだった。和尚も「どうしようもない悪ガキ」だった稔をかわいがった。稔が毛虫を従姉妹の背中に入れた事を怒られてた時には
「毛虫は腫れる事があるからいかん。やるならカエルにしろ」
と、こっそり焚き付けた。稔の弟の優が大人しくて親戚中に「さすがねえ」と誉められ、むくれているとせせら笑った。
「なんだ。誉めてもらいたいか。悪ガキは誰にでも出来る事じゃない。やるなら徹底してやれ。誉めてもらいたいなら、やめちまえ」
それで、稔は腹を括って悪ガキ道を極めて、親に呆れられた。
「稔じゃないか」

和尚は、まるで稔が数日ぶりに訪ねてきたようなあっさりした迎え方をした。ずいぶん歳を取ったな。稔は思った。
「お前、帰ってきたのか」
稔は黙って首を振った。
「じゃあ、なんだ。幽霊か」
「まあ、そんなもんだ。じいちゃん、達者か」
「見ての通りだ。どこも悪い所はない。飯はうまいし、よく眠れる。お前、どこにいた」
「ヨーロッパ。一ヶ月したらまた行く」
「なぜ」
「もう戻らないつもりだった。戸籍謄本が必要になって取り寄せたら、親父が除籍されていたから……」
「癌だ。三年くらいだったな。最初の手術は上手くいったんだが、二度目に見つかってからは転移が早くてな。あと半年早く帰ってくれば会えたんだがな」
稔は答えずにうなだれた。
「墓に行くか」
「ああ」
墓石に戒名と名前が刻まれている。五年前には豪快に笑ったり、烈火のごとく怒っていたりした父親が今はこの石の下に骨だけになって置かれている。稔は墓石を両腕で支えるように立ち、そのまましばらくうなだれていた。和尚には稔の肩が震えているのが見えた。
「ごめんよ、親父……。ごめんよ……」
稔の心には白い紙吹雪が満ちている。あの朝、俺は、こうなる事を選んだんだ。
あの時、あんたにはどうしてもあの三百万円が必要だったよな。俺は、自分だけであの金を用意することができなかった。俺は陽子に自分を売ったつもりだった。あれはそういう金だった。だが、俺がしでかしたことで、あんたは三百万どころじゃない重荷を背負ったんだろうな。自分の事しか考えていなかった。本当にごめんよ、親父。

和尚は稔が落ち着くのを黙って待っていた。それから稔を本堂に連れていき、野菜と日本酒を出した。
「まだ昼前じゃないか、じいちゃん」
「お前が昼前は飲まないなんてクチか」
確かにArtistas callejerosの仲間とは、朝とか夜とかつべこべ言わずに勝手に飲んでいる。とはいえ、今はそういう状況かとも思う。
「こういう状況だから飲むんだ。ほれ」
稔は肩をすくめて杯を受け取った。
「美味い……」
「そうだろう、ヨーロッパじゃ飲めない酒だぞ」
「うん。じいちゃん。ごめんよ」
「わしに謝る事はなにもないだろう。それより家には帰ったのか？」
「昨日、日本に着いたんだ。今朝、浅草まで行った。でも、行けなかった。電話も出来なかった。だから、ここに来たんだ」
「そうか。じゃあ、家の状況は知らないんだな」
「うん。何か、変わったのか」
「優くんが嫁をもらうことになった」

「へえ。五年も経ったからな、彼女が出来て、結婚しても不思議はないよな」
「相手は陽子さんだ」
稔は目をしばたいた。え〜と。今、なんて言った？　どのヨウコさん？
「お前が失踪して以来、いろいろあってな。陽子さんは頻繁に出入りする事になり、そのうちに優くんと仲良くなったってことだ。隆の看護も未来の嫁として献身的にしてくれたし、周子さんとも上手くやっているよ」
　そりゃあ、おふくろは陽子に頭が上がらないだろう。長男が結婚資金をだまし取って失踪したんだから。結局の所、陽子はやっぱり安田家の嫁になるってわけか。優にあのヘビ女の相手が務まるのか疑問だが、本人がそれを望んでいるなら俺がどうこう言う事はないよな。
「そうか。じゃあ、俺が今更、のこのこ顔を出したりしない方がいいのかもしれないな」
「周子さんはお前に会いたいだろう。自由意志で帰ってこなかったのわかっているし、ヨーロッパ各地を移動しているらしいと陽子さんが言っていたから、みな大きな心配はしていないけれどな」
　稔は黙って酒を飲んでいた。和尚は、にやりと笑って言った。
「こうしよう。明後日、ここにもう一度来い。お前の家族が皆で法事にくる事になっている。お前は、みんなに見えない所にいて、もし会いたければ、出てくればいいだろう」
「じいちゃん」
「お前が、日本にきちんと帰ってきてやり直すつもりなら、こんなことは言わん。だが、お前は一ヶ月でまたいなくなると言う。それならば、却って大騒ぎにしない方がいいかもしれない。そうだろう」
「うん。ありがとう、じいちゃん。恩に着る」

　真耶の家に戻ると、居間では蝶子が真耶のヴィオラの伴奏をしていた。フォーレの『夢のあとに』か。テデスコほどではないけれど、お蝶のピアノも大したものだ。この曲、初見なんだろうに、ちゃんと形になっているじゃないか。レネは真耶の父親のカルバドスを、ヴィルはエビスビールを飲んでいた。
「このビール、美味いな」
ヴィルは日本のビールに合格点を与えた。あれ、変だな。稔は首を傾げた。なんか今日はやけに嬉しそうじゃないか？　ガイジン軍団は。
「今日は、何をしたんだ？」
稔が訊くとレネは嬉しそうに答えた。
「インペリアルホテルで食べ放題のデザートを食べたんですよ。それに真耶さんと皇居の散歩」
なんだよ、それ。ブラン・ベックはともかく、なんでテデスコがそれでこんなにリラックスするんだ？
「ヤスの方はどうだったんです？」
レネが直球を投げてきた。
「うん。明後日出直しだ。お前ら、旅行に出るなら、先にいってもいいぞ。追いかけるから」
「いや、明後日ならすぐじゃないですか。明日から、パピヨンが東京や横浜を案内してくれるって言っていましたから。旅行の事は明後日

以降に考えましょう」
「テデスコもそれでいいか？」
ヴィルは黙って頷いた。それからまたグラスを傾けながら、二人の演奏に意識を戻していた。ふ～ん。稔はわかったような顔をした。トカゲ女と何かあったんだな。何にせよ、嬉しいなら何よりだ。

稔は新堂和尚に言われたように、朝一番の電車でやってきた。
和尚は、稔を食事の用意がしてある畳の部屋の奥に連れて行った。
「ここで座禅でもしていろ」
それは部屋というよりは納戸といったほうがいい小さな空間だった。窓もない。和尚は一ダースほどのロウソクとマッチを置いて行った。
子供の頃、いたずらが過ぎてよく浅草の家の納戸に閉じ込められた。その時はロウソクなどという贅沢なものは支給してもらえなかった。けれど、稔にとってその罰が過酷だったのは最初の二、三回だけだった。直に稔は馬鹿げたいたずらを反省する代わりに、空想世界に遊んだり、次のいたずらを計画したり、もしくは自分の内なる音楽を成熟させるのにその時間を使うようになった。
目をつぶり、背筋を伸ばす。両の手に空氣で出来た三味線が載る。それから、稔は自分だけに聴こえる音で三味線を奏でだす。子供の頃の自分には出来なかった高度なテクニックも、納戸の中ではなんなくできた。もういいだろうと、納戸を開けにきた父親は、稔がそうやって空氣の三味線を弾いているシーンに出くわして仰天したものだ。こいつはどえらい奏者になるかもしれない。父親が稔に過度な期待を始めたのはそれからだった。
稔が弾いていたのは三味線だけではなかった。ギターも稔の大切な内なる音楽だった。稔は自分の中の東洋と西洋を自由に行き来することができた。どちらも稔にはなくてはならない世界だった。どちらかを選ぶなどとてもできそうになかった。
父親の安田隆にとっては、明白な選択だった。安田流創始者、安田勇一の長男として生まれた自分になかった才能を、その長男である稔が持っている。安田流の家元は父親の一番弟子であった妻の周子が継いだが、やがて長男の稔が継ぐことができる。
祖父の勇一は、稔が五歳の時に他界した。周子は類い稀な三味線奏者であったが、勇一のような強いカリスマ性はなかった。また、後継者を育てるための厳しさも欠けていた。熱心に教えはしたが、嫌われるほどの厳しさが持てなかったのだ。それで、二番弟子だった遠藤恒彦をはじめとする安田流のほかの奏者たちが力を持ち、家元の求心力がなくなりだしていた。
遠藤恒彦は、自分の息子や娘にも熱心な教育を施し、中でも長女の陽子の才能は著しかった。陽子は名前の通り快活で向上心の強い娘だった。男勝りで、女だからといって軽んじられることを何よりも嫌った。発表会ではトリを望んでいたが、家元の長男である稔が務めることが多く、よく地団駄を踏んでいた。
稔は流派の中でのポジションなどにはほとんど興味がなかった。どの曲を弾かせてもらえるのか、それをどのように弾くのか、大切なのはそれだけだった。自分の内なる音楽を表現する新たなページがめくれればそれでよかったのだ。

「あなたは、初めから家元の座が約束されているんだもの。余裕よね」
陽子は、闘争心のない稔に不満をぶちまけた。どちらにしても陽子と張り合うライバルと言えるジュニアは稔ひとりだった。稔の弟の優など三味線奏者と認める氣にすらならなかった。
陽子は、稔がギターを弾いているのも氣に入らなかった。そんなヒマがあるなら、もっと三味線に精進して自分と戦ってほしいと思っていた。けれど、稔の奏でるギターが、三味線では出せない心象を表現することを陽子も認めていた。

才能に恵まれなかった父親の卑屈も、家元としての統率力に欠ける母親の苦悩も、我こそが真の家元と暗躍する遠藤恒彦の思いも、トップ奏者を目指して肩意地を張る陽子のライバル心も、稔には苦痛だった。高校を卒業する頃には腹を括って進路を決めなくてはならなかった。稔はギターを選びたかった。だが、それは許されなかった。父親も母親も、稔に家元を継がせるつもりだった。稔の実力は遠藤恒彦ですら認めざるを得なかった。陽子がテクニックで稔に劣るわけではなかった。もしかしたら陽子の方が、テクニックでは稔を凌駕していたかもしれない。しかし、稔の音には心地の良い個性があった。聴くものを惹き付ける華やかな魅力があった。そして、その人柄も多くの信奉者を作った。弟子たちの中には、性格のきつい陽子を毛嫌いするものも少なくなかった。こんにゃくのように頼りない優には尊敬が集まらなかった。稔の明るさとバランス感覚は、安田流を一つにまとめていくためには必須だと思われていた。
いずれは家元になり安田流を束ねていくというプレッシャーは常に稔の重圧となっていた。花嫁候補として、いつも陽子の名前が挙がるのにも辟易していた。だれが、あんなヘビ女と結婚するかよ。稔はいつも心の中で毒づいた。
陽子が年頃になり、以前のように稔を不倶戴天のライバルとして競争心をむき出しにしなくなってきたことも、稔には居心地が悪かった。陽子は稔を恋愛対象としていた。稔としてはまっぴらだった。バレンタインのチョコレートを持ってこられるのも、強引にデートに誘われるのも迷惑だった。だが、稔がかなりはっきりと断っても陽子はへこたれなかった。稔の相手としても、未来の家元夫人としても自分ほどふさわしい人間はいないと強い自信を持っていた。
そして、あの事件があった。安田流の会計を預かっていた父親が投資に失敗して、多くの負債を抱えたのだ。返済が焦げ付き、銀行に頭を下げ、あちこちの親戚からかき集めても、どうしても月末までに三百万円足りなかった。それをポンと出してくれたのが陽子だった。
「これね。ＯＬの乏しい稼ぎの中から、結婚資金のために五年かけて貯めたお金。だから、これがなくなるとお嫁に行けなくなっちゃうの。でも、稔は責任とってくれるわよね」
稔に用意できる金額は五十万円が限度だった。稔は、諦めて安田流に骨を埋めること、そして三味線と人生の配偶者として陽子を選ぶことを決めざるを得なかった。
最後のわがままと言って、ヨーロッパに出かけた稔が、最後の最後に約束を反故にして逃げ出した時に、安田流でどんな騒ぎになったのか、稔は知る由もなかった。

稔はロウソクの明かりを見つめながら、無意識に三味線を弾いていた。逃げ出したことをもう悔やんではいない。安田流と安田家にも帰りたいという想いはどこにもなかった。安田流にも安田家にできた空白は、もう埋まっていた。この五年間で稔の不在を乗り越え、稔なしの日常を紡ぐようになっていた。そのことは稔にとってショックなことでも悲しいことでもなかった。愛情深く優しい母親、稔を認めて励ましてくれた父親、頼りないが愛すべき弟が恋しくないかと言えば嘘になる。だが、それは『新堂のじいちゃん』を恋しいと思う氣持ちとほとんど変わりなかった。いまの稔にとって、帰る場所であり、自分の居場所を失いたくないと思うのはArtistas callejerosだった。絶対に離れたくないと、能動的に強く願うのはあの三人だった。そして、稔の内なる音楽を表現できる場も、Artistas callejerosにしかなかった。選ぶ必要すらなかった。日本に来るまでの迷いがすべて消えた。俺は、やはりお蝶たちと一緒にヨーロッパに戻るんだ。それ以外ないんだ。

やがて、隣の部屋にどかどかと音がして、和尚を先頭に人々が入ってきた。

「さ、お清めじゃな、遠慮せずにどんどんやって。ああ、優君、悪いが冷蔵庫のビールを持ってきてくれるかな」

話し声で、その場に母親と優がいるのがわかった。叔父や叔母、それに従兄弟もいる。遠藤陽子もいる。全部で十人ほどだろう。一時間ほど、みながほろ酔い加減になって食事をしているのを稔は、空想のギターを弾きながら聴いていた。なんとなく、がやがやしていたのが静まると、和尚が不意に言った。

「そうそう、その閉め切った部屋には、一人瞑想をしている檀徒がいましてな。そこは開けないでほしいんじゃ」

「どうしてはじめにおっしゃってくださらなかったんですか。こんなに騒いで迷惑になったんじゃありませんか？」

怪訝な声は母親の周子だ。

「いいんだ。ちゃんと了解済だから」

和尚はひと呼吸置いて、再び言った。

「もう一つ、みなさんに知らせたいことがありましてな」

静まり返った。和尚は静かに続けた。

「つい先日、ここに稔が来たんじゃ」

蜂の巣をつついたような騒ぎになった。どこにいたんだとか、どうして報せてくれなかったんですかとか、元氣でいるのかというような声がなんとか聞き取れた。

陽子と周子はほぼ同時に、閉め切られた戸に目をやった。こんなにうるさい宴会場の横で瞑想をするなんていう物好きな輩がいるはずはない。それは稔に違いないと。その二人が何かを言い出す前に和尚は続けた。

「稔と話をして、あいつはもう戻らないということを確かめた。あいつは隆の死を知って、とにかく戻ってきた。墓の前で泣いて隆に詫びていた。けれど、あいつにはあいつの新しい人生がある。そして、あなたたち一家それぞれの新しい人生のことも知って祝福している。もう時計は元に戻らない。とんでもない親不孝なのは本人も十分承知だが、幸せに生きている稔のことを許して、諦めてやってくれないか、周子さん」

沈黙の後、周子がすすり泣く声が聞こえた。不意に、陽子が言った。
「ねえ、皆さん。いまから隆先生のお墓参りに行きましょう。ね」
「なんで、いきなり……」
わかりの悪い優をつねると、陽子はその場にいるほぼ全員、つまり周子と和尚以外を寺の裏手の墓地へと連れて行った。
静まり返った和室に和尚の笑い声が響く。
「いいお嫁さんじゃないですか、周子さん」
「はい。感謝しています」
「もし、わしに稔のやつが再び連絡してきたら、伝えたいことがありますか」
周子は再び泣き出した。
「もうしわけ……ないと……。どうか許してほしいと……」
「それは稔の台詞ですぞ」
「いいえ、違います。稔はずっと我慢していたんです。子供の頃から。それがわかっていて、私にはどうすることもできなかった。あのお金だって、稔のせいじゃないのに……。今だって、優と陽子さんが結婚する安田家には、稔が帰ってくる場所がない……。ほんとうにかわいそうに……」
稔は、我慢できなくなって涙をこぼした。ごめんよ、おふくろ……。
そのわずかなすすり泣きの漏れてくる戸を見つめて、周子は頭を下げた。
「和尚さま、どうか、稔に伝えてください。もう十分だって。墓参りに帰ってきてくれただけで、それで十分だって。でも、もし、本当に帰ってくる氣があるなら、私がどこかに遷ってでも、お前の居場所を作るから心配するなって……」
やがて、安田家が去り、奥の部屋の扉を和尚が開けようとした時に、息を切らして陽子が入ってきた。
「待って、和尚さま」
陽子は、バッグから封筒を出すと、それを和尚に渡した。
「本当は、これ、今日お母様に渡すつもりで持ってきたんだけれど。次に稔が連絡してきた時に渡してほしいの」
それだけ言ってウィンクするとまた走って出て行った。扉を開けて自分でてきた稔に和尚はその封筒を渡した。稔が中をのぞくと、一万円の束だった。数えなくてもわかった。過剰に送った三十二万円だ。律儀なヤツだな。利子として受け取っておけばいいのに。稔は、封筒をポケットに無造作に突っ込んだ。
真耶の家に着いたのは九時近かった。真耶とArtistas callejerosの三人が、居間でワインを飲みながら話していた。
「ごめん。遅くなった」
稔は、新堂和尚にもらった大吟醸生酒『不動』の一升瓶をどんとテーブルに置いた。
「あら。千葉の名酒じゃない。いいものを手に入れたわね」
蝶子がにんまりと笑った。稔は呆れた。
「なんでお前が千葉の酒の銘柄に精通しているんだよ」
「偶然よ。これ、飲んだことあるの。もう二度と飲むことはないと思っていたけれど。帰ってきてよかったわ」

真耶は笑って、席を立ち、江戸切子の水色の猪口を五つ持ってきた。しばらくするとお手伝いの佐和さんが、鶏肉とキュウリの梅和えや、冷や奴、もろみ味噌を添えた生野菜スティックなどを持って入ってきた。稔と蝶子は大喜びし、ガイジン軍団ははじめての日本酒と肴の登場に顔を見合わせた。

ヴィルはすでにドイツで日本酒を飲んだことがあったが、美味しいと思ったことはなかった。それで、大して期待もせずに猪口に口を付けた。

「どうだ。飲めるか？」

日本人三人は興味深く見ていた。ヴィルは怪訝な顔をして切子の猪口の中を覗き込んだ。

「……美味い。これ、本当にサケか？」

蝶子が声を立てて笑った。

「ワンカップ大関みたいな日本酒しか飲んだ事ないんでしょう？」

レネも、おそるおそる飲んでやはりフルーティな味わいが氣に入ったようだった。

「フルーツの蒸留酒ですか？」

「ちがうよ。米だ。混じりっけなしの手作りだぞ」

「この肴もいいわねぇ。やっぱり、私は日本人なのねぇ」

蝶子は嬉しそうに言った。ガイジン軍団もそれらが問題なく氣に入ったので、これからの旅行でも和食を食べさせて大丈夫だと稔と蝶子はにやりとした。

「パリでけっこう美味しいと言われる日本料理店にも行ったんですけれどねぇ。全然美味しいと思わなかったんですよ。どうしてだったんだろう」

レネが首を傾げる。

稔にはレネのいう意味がよくわかった。ヨーロッパのそこそこの値段の日本料理店では、大した日本の味は楽しめない。刺身は赤黒いし、照り焼きチキン定食のようなものでも単に甘辛いだけの単純な味付けのものしか出てこない。米の飯は最低だ。しかし、これは日本料理店が悪いのではない。ヨーロッパの硬水ではいずれにしろふっくらとした白米など炊けはしないのだ。あの値段を出して、あの程度の味しか楽しめなければ、ヨーロッパで日本料理が中華料理ほどには受け入れられないのも無理はないと思う。だから、稔も蝶子ももう何年も和食を食べに日本料理店に行ったりはしていなかった。

「お家は大丈夫だったの？」

蝶子が訊いた。稔は頷いた。

「俺、公式にはまだ失踪したままなんだ。だけど、もう、家族は失踪した俺のことを心配しないと思う。俺は未だに家族だけれど、もう完全に安田流からはいない人間になった。帰ってきてよかったよ」

三人は黙って頷いた。真耶は、三人がそれ以上の詳細を訊きたがらないことに驚いたが、敢えて口を挟まなかった。稔は申し訳なさそうに真耶に言った。

「園城、わるいけれど、お前のことを何かあったときの連絡先にしちまった。家族や安田流から直接あんたに連絡が来ることはないが、もしかすると新堂沢永という坊さんから俺に連絡を取ってほしいと言われるかもしれない。そうしたら、例のバルセロナのコルタドの館に連絡を入れてほしいんだ」

「わかったわ。お易い御用よ。蝶子もそうしていいのよ」
真耶は言った。蝶子は肩をすくめた。
「うちの家族はヤスみたいに帰ってくるのを心待ちにしているわけじゃないから」
「まったく氣にもしない親なんているかしら」
真耶が眉を顰めた。蝶子はあっさりと答えた。
「事情があるのよ」
「どんな？」
蝶子はため息をついた。他の三人が一年以上遠慮していることを、真耶ったらガンガン突っ込むんだから。
「この顔のせいなの」
蝶子は切子の『不動』を一息に飲み干した。稔がすかさず杯を満たす。今夜はしゃべるぞ。蝶子はその稔をひと睨みすると、ゆっくりと言葉を選んだ。
「前にも話したことあると思うけれど、私の顔は両親どちらにも似ていないの。で、何故か、母親の元の恋人にとてもよく似ているのよ」
ありゃりゃ。稔は地雷を踏んだ氣持ちだった。真耶は、居心地が悪くなった。蝶子は続けた。
「別にＤＮＡ鑑定して明白になったわけじゃないのよ。単なる隔世遺伝のいたずらなのかもしれないんだけれど、父親と母親は私の顔のせいで無言の確執があったらしいの。それなのに私がとんでもなくお金のかかる西洋音楽をやりたいと言い出したものだから、父親も母親もすごく反対したの。父親は自分にそっくりな妹の華代が短大の英文科でいいといっているのに、よりにもよって私が音大にこだわるのが腹立たしかったし、母親は私のことでまた父親と確執ができるのがイヤで猛反対したわ。それで、私は両親から家族をとるかフルートをとるかどっちにするんだと迫られちゃったわけなの」
「で、フルートを選んじゃったんですね」
レネがとても悲しそうに言った。
「悲しむことなんてないのよ、ブラン・ベック。私が恋しがっているなら悲劇だけれど、そうじゃないんですもの」
真耶と稔、そしてレネにはそういう蝶子がやせ我慢を言っているように聞こえた。しかし、ヴィルはそう感じなかった。ヴィルも両親に対してうんざりしていた。大人になり、その庇護から離れて生きられるようになったことがとても嬉しかった。暖かい家庭、例えばレネの家族のもとに行った時などに、寂しさを感じることはある。だが、それは自分には帰る家庭がないという寂しさであって、実の両親に対する思慕ではなかった。蝶子が語っているのはそういうことなのだ。
「あんたは正しい選択をしたんだと思うよ」
ヴィルは言った。他の三人はその冷淡な物言いに驚いたが、蝶子はわかってくれたことを喜んだ。艶やかに笑ってヴィルの猪口にさらに『不動』を注いだ。
「そう思うでしょ？　ブラン・ベックのカードもそういったわ。今の道は間違っていないって」

東京、園城家にて

拓人は、真耶の家の居間で、リストの「コンサート用エチュード三番」を弾いていた。真耶が好きでよく弾かされる曲だ。弾きながら、目はさりげなくヴィルを観察していた。先ほどここについて紹介された時に、もう少しで声を出すところだった。ピアノの上手い謎のドイツ人だって？　蝶子も真耶も何を言っているんだ？　拓人は二人がふざけているのかと思った。

ミュンヘンに留学していた時に、拓人がしばらくつきあっていたのはイギリスからのフルートの留学生だった。彼女がコンクールで六位入賞した時に、会場で有名なエッシェンドルフ教授を見た。

「ほら、あれがエッシェンドルフ教授よ。フルートで身を立てるなら師事したい先生ナンバーワンでしょうね」

「なぜ、君は頼まないの、エヴェリン？」

「そう簡単に見てもらえないわ。お眼鏡にかなった本当に上手い人しか見ないんだって。それにね。たとえ教授が見てくださるとおっしゃっても、私の親が許してくれないと思うの」

「何を？」

「女があの教授に教えてもらっているってことはね。お手つきになる可能性が高いってことなの。私はフルートで食べていきたいとは思っているけれど、親は私に立派な人と結婚してもらいたいと思っているから、そういう噂の起こりそうな先生はね」

拓人は、そりゃ羨ましい教授だ、と心の中で思った。

「だけど、さっき優勝した教授の弟子は男だったぜ？」

「やだわ。名前を見なかったの？　あれは教授のひとり息子よ」

「へえ。家庭があるのに、好き勝手しているんだ。さすがヨーロッパの上流社会は……」

「あら。教授は独身よ。昔、名家のお嬢さんと結婚していたけれどすぐ離婚したんですって。今日優勝したアーデルベルトのお母さんとは結婚していないの。お母さんも昔の教え子みたいね。でも、教授は息子の才能に惚れ込んでいるみたいよ。教授の後ろ盾があって、さらに両方からの遺伝であの腕ですもの、きっとすぐに有名になるわね」

優勝に笑顔を見せるでもなく、真っ直ぐ背を伸ばして教授と並んで立っていた金髪の男を拓人は十年以上経った今も忘れていなかった。髪型と服装は違うけれど、まちがいなくそこにいるドイツ人だ。

だが、本当に蝶子と真耶は、ドイツ人をただの演劇青年だと信じているようだった。

「ねえ、いいでしょう。ヴィルさんも何か弾いてよ」

「たった今、その達者な男が弾いたその後に？」

嫌がらせにもほどがある、という顔だった。だが真耶は満面の笑みで強制した。稔は、ここにもひどい女がいるぜ、と思った。ヴィルが渋るので蝶子もカルロスに夕食をねだる時のような笑顔を追加した。ヴィルは諦めたように、拓人の空けたピアノの椅子に座った。

「短いので勘弁してくれ」

そういうとエルガーの『愛の挨拶』を弾いた。真耶は拓人にほらね、という顔をしてみせた。優しく明るい音色だった。カルロスの館で、それともマラガで聴かせたような、重く苦しい響きを想像していた蝶子

は少し驚いた。彼はどこか変わった。蝶子は思った。真耶に会ったからなのかしら。
でも、あの晩、私の告白のあとに真耶が突っ込んでも、彼は自分の事を何も話さなかった。蝶子はそれを残念に思っていた。どうして何一つ話してくれないんだろう。

お茶が済むと、真耶が庭の薔薇を見せるといった。レネは飛び上がらんばかりに大げさに喜んで同意し、蝶子も、座っているのに飽きた稔も席を立った。拓人は言った。
「僕は、遠慮するよ。ヴィル君、君も薔薇の間の散歩が好きか？」
「いや、俺は薔薇にはそれほど興味がないんだ」
それは蝶子に向けていった台詞だった。
「だったら、ちょっとピアノの技術的な事について君と意見を交わしたいな」
ヴィルは特に何も言わずに残った。

「結城さん、素敵になったわねぇ」
外に出ると、蝶子は言った。真耶は微笑んだ。
「ね。いい音を出すようになったでしょう？」
「そうね。昔から上手だったけれど、深みが違うわね。それに、いい男になったわ。今だったら二つ返事で付いていくのに」
「なによそれ」
「大学生の時、他の子たちと同じように一度は迫られたのよ。でも、返事を渋っているうちに、さっさと次のターゲットに行かれちゃった。今から名誉挽回させてくれないかしら」
蝶子はぺろりと舌を出した。真耶は厳しい顔で言った。
「ダメよ、絶対に」
「なんでよ。あの人あいかわらずプレイボーイなんでしょ？　真耶は氣にもしていないんじゃないの？」
「他の女の人はいいの。遊びでも本氣でも。でも蝶子だけはイヤ」
「どうして？」
「彼と奏でる音楽は私の聖域なの。蝶子はそこまで入って来れるから」
蝶子は真耶をちらりと見た。何を心配しているのよ。そんな深くに私が食い込めるわけないじゃない。
稔は、こいつらなんて会話をしているんだ、と呆れた。テデスコがここにいなくてよかったよ。また思い詰めるからな。

蝶子がまだ学生だった頃、ラヴェルの『亡き王女のためのパヴァーヌ』をフルートで吹いたのを拓人は憶えていた。美しい響きだったが、今、ヴィルがピアノで弾いているような、強い情感はなかった。あの頃は拓人も真耶も蝶子もまだ若かった。技術を切磋琢磨していたが、心はまだ音楽にふさわしくなかった。十年経ち、人生経験を繰り返して僕たちは音楽家になりつつある、そう拓人は思った。それはここにいるこの男も同じなのだ。
四人が庭にいるのを窓越しに確認して、拓人はピアノの上に身を乗り出し、ヴィルの顔を見据えて言った。
「君が誰だか蝶子がまったく知らないとは驚きだな、エッシェンドルフ君」

拓人の言葉にヴィルは大して驚いた様子をみせなかった。演奏の手を止めると立って窓辺に行き、真耶と連れ立って薔薇を見ている蝶子を見ながらぽつりと言った。
「まさか、東京で名前を知っている人間に会うとは予想もしていなかったな。どこでそれを知った」
「僕もドイツに留学していたんだ。蝶子より三年くらい前に。君がフルートのコンクールで優勝した折に、お父様のエッシェンドルフ教授と一緒にいたのを憶えているよ」
「で、どうする氣だ？　なぜわざわざ誰もいない所でそれを俺にいうんだ」
「何か事情があると思うからさ。蝶子が教授のもとから去った理由を僕は知らない。君が父上の広大な領地を継いで結構な暮らしをする代わりに、大道芸人をしている理由も。だが君は蝶子のことを知っていたんだろう？」
「ミラノで会うまで面識はなかった。名前は知っていた。シュメッタリングは過去の事を何も話さなかったが、バイエルンなまりのドイツ語を話すフルートの達者な四条蝶子がそんなにたくさんいるはずはないからね」
「君はもうフルートは吹かないのか」
「だいぶ前にやめた」
「残念だな。あんな卓越したフルートはなかなか聴けないのに。蝶子のフルートを聴いて吹きたくはならないのか」
　ヴィルはしばらく答えなかったが、やがて言った。
「吹いたら最後、正体がばれるだろう。俺はまだもう少しあいつといる時間がほしいんだ」
　拓人は納得したように頷いた。
「僕は部外者として君の事を蝶子や真耶に黙っていてもいいが、条件がある」
「なんだ」
「蝶子に危害を加えるな」
　ヴィルは眉をしかめて目を閉じた。それから吐き出すように言った。
「危害を加えられているのはこっちだ」
　拓人はちらりとヴィルを見て頷くと、黙って『亡き王女のためのパヴァーヌ』を弾き出した。この男は、何か事情があって本名を隠して蝶子と同行する事になった。けれど、その目的を達成する前によりにもよって当の蝶子を好きになってしまった。もはや目的を実行する事も出来なければ、正体を口にする事も出来ない。そんなところだろう。蝶子はこの事を知ったらどうするのだろう。Artistas callejeros のメンバーに対する強い信頼は、拓人には蝶子の信仰のようにすら見えた。もしそれが崩れたら、彼女はもう二度と人間を信用できなくなるかもしれない。
「忠告しておくよ。あまり長く待たない方がいい」
拓人はヴィルに言った。ヴィルは黙って窓の外の蝶子たちを見下ろした。
「君は多くを語らない人だ。想いは君の中でどんどん育っていってしまう。君はそのうちに黙っていられなくなる。蝶子のフルートを聴き続ければフルートも奏でずにはいられなくなる。だが信頼も日々育っている。大きくなればなるほど、壊れたときの衝撃に君も蝶子も堪え

られなくなるだろう」
「あんたの言う通りだろうな」
もう既に遅すぎるのかもしれなかった。ロンダで蝶子の言った言葉が甦る。
「失いたくないものが出来てしまったの」
その通りだった。Artistas callejeros に加わるまで、ヴィルにも失いたくないものなど何もなかった。音楽は常に自分の中にあった。けれど今、彼が必要としているのは内なる響きだけではなかった。もう一人には戻りたくなかった。

「テデスコは日本の旅行なんか行きたくないんじゃないかしら」
蝶子は拓人とヴィルの姿のよぎる窓を見上げて言った。
「なぜ？」
「日本の薔薇を愛でるために、ここに居たいんじゃないかと思って。ずっと日本に残りたいなんて言い出したりしてね」
蝶子の意味ありげな微笑を見て、真耶は蝶子の顔を真剣に覗き込んだ。
「蝶子。それ、嫉妬なの？　それとも、あり得ないと思うけれど、まさか、氣がついていないなんてことはないわよね」
「何に？」
「だから、ヴィルさんが、誰のことをいつも見つめているのかって話」
蝶子はしばらく答えなかった。やがて真耶を見ずに小さくつぶやいた。
「そうかな、と思った事はある。でも、きっと勘違いだったのよ。真耶にはとっても素敵に笑いかけていたもの。私はそれで構わないのよ」
真耶はため息をついた。
「あきれた。本当にわかっていないのね」
五分でも側にいれば誰でもわかるほどなのに。彼は苦労するわね。それにしても、なんでさっさと行動に移さないのかしら。小学生じゃあるまいし。

東京、ワインを飲みながら

「間に合わなかったらどうしようかと思ったじゃない」
新幹線になんとか間に合ったので、安堵して蝶子は席に沈み込んだ。国内旅行に出る前の日に、稔は拓人と飲みに行ったまま帰ってこなかった。それで、蝶子はヴィルとレネを連れて、東京駅の新幹線の改札でぎりぎりまで待ち、発車直前に駆け込む事になったのだ。
「悪い。つい寝過ごした。結城は今日はオフだったんだ」
稔は荷物を上の棚に載せて謝った。
「結城さんが泊めてくれた上に、ここまで送ってくれたの？」
「うん。すごかったぜ、結城の億ション」

拓人と稔は学生時代から仲が良かったわけではなかった。だが、真耶の家では稔は同い年の日本人である拓人と話す機会が多く、一緒に飲みにいかないかと誘われた時にも特に違和感がなかった。
拓人はヴィルの言葉を信用していなかったわけではないが、念のために稔に少し話を聞き、必要とあれば様子を見るように話すつもりだった。
「真耶は、君たちが偶然旅先で会ったらしいと言っていたが、そうなのか？」
拓人の行きつけという静かなバーで、かなり高そうなワインを飲みながら、東京の夜景を眺めつつ稔は答えた。
「そうなんだ。コルシカ島からイタリアに戻るフェリーの上でさ、フルートを吹いている女がいたんだ。よく見たらフルート科の四条蝶子だったから驚いたよ。お蝶は俺の事は憶えていなかったけどな」
「君は蝶子がそんな所にいた理由を知っているのか？」
「だいたいのところはな。ドイツで恩師と恋愛関係になったけれど、結婚したくなくて逃げ出してきたって言っていた。でも、園城の方が詳しいよ。俺はその教授とやらを知らないんだ」
「僕は、一度見かけた事がある。有名な教授だ。ドイツのフルート界では一番の権威だ」
「へえ。そういえば、あんたもドイツに留学していたんだっけ。でも、そんな権威ってことは、相当な歳じゃないのか？」
「ああ。恋人っていうよりは父親の世代だよ。もっとも女の弟子には、必ずと言っていいくらい手を出すんで、別な意味でも有名な人でね」
「え……。そうだったんだ。じゃあ、お蝶は助平教授の不実さに愛想を尽かしたのかな」
「いや、ザルツブルグで二人に会った真耶によると、教授の方が蝶子に舞い上がってたそうだ。教授は図らずも本氣になってしまったんじゃないか。婚約していたらしいしな」
「プレイボーイにもそういう事ってあるのかなあ。プレイボーイって意味じゃ、お前、その教授なみだろ。どうなんだよ」
「あるさ。普段、真剣じゃない分、いったん恋に落ちると深いのさ」
稔は拓人をまじまじと見た。ホントかよ。拓人は、何かを思い出すように少し考え込んでいた。ふ～ん。こいつも軽い恋愛を楽しんでいるだけじゃないんだな。
「君はどうなんだ」
拓人は稔に訊いた。

「俺？　恋愛の話か？　それとも大道芸人している理由の話？」
「失踪しているって聞いたぞ。それも恋愛がらみか？」
「俺の恋愛じゃないけどね」
「誰のだ」
「俺が恋愛対象に出来なかった女だよ」
ほう。拓人は意外に思って稔を見た。
「きっかけはその女だった。でも、俺はたぶんずっと逃げ出したかったんだと思う。家元制度とか、いろいろなものから、自由を求めて。で、本当にやっちまった。やっちまったらもう後戻りは出来なくなった。したくなかった。俺にとっては正解だったと今でも思う。でも、その分いろいろな人を傷つけ、迷惑もかけた」
「その女性に今回会ったのか？」
「いや。たぶん一生会う事はないと思う。弟と結婚するらしい」
拓人は黙って稔を見た。
「ほんの少しだけ、楽になったよ。あいつはヘビ女だったけれど、あんな風に恥をかかせて、苦しめていいってことはないからな。幸せになると聞けば嬉しいよ」
稔は拓人に笑いかけた。拓人も笑った。
「君はまじめだな」
「まじめな人間が失踪なんかするかよ」
「女一人を振るのに、失踪しなくちゃいられないほどまじめってことだろ。安心した」
「何が」
「蝶子のこと、氣になっていたんだ。でも、君が側にいれば安心だからな」
「トカゲ女は、俺なんかいなくても強く生きていくぜ。そんなにお蝶を氣にいっていたんだ？」
「落ちなかった女の方が思い入れは強くなるものだからな」
拓人は、こともなげに言った。
「今から名誉挽回させてくれないかしらって言っていたぜ。試すか？」
拓人はちらっと稔を見て言った。
「本氣で勧めているのか？」
稔は激しく首を振った。
「テデスコのいない所でやってくれ」
拓人は笑った。
「そういうと思った。無理だよ。あのドイツ人の前で蝶子に手を出す氣にはなれない。それに、真耶と蝶子があそこまで仲が良くては」
「お前にとって園城ってなんなんだ？　親戚？　音楽だけのパートナー？　それとも？」
稔は一度聞いてみたかった事を突っ込んだ。稔の観察が正しければ、真耶の方は拓人に対してそれ以上の特別な感情を持っているようだった。
「そんなちっぽけな存在ではないな。双子の片割れか、それとも自分自身の一部くらいの近さがある。たとえ誰かと結婚して、離婚してなどという事を繰り返したとしても、真耶は常に側にいるだろうな。だからこそ、僕も真耶も独身のままでいるのかもしれない。結婚する相手よりも近い人間がいるなんて面倒な事じゃないか」
「園城と結婚する氣はないのか？　親戚といったって、出来ないほど

近いわけじゃないだろう」
「真耶と結婚？　あいつは僕を恋愛対象にした事はないんだぜ？」
「そうか？俺にはそうは見えないけどな。似合うぞ。お前ら」
「ふん。そうか。お互いに誰からも相手にされなくなったら、そうするかな」
だめだこりゃ。
「君はどうなんだ、蝶子のこと」
拓人は稔に訊いた。
「勘弁してくれ。こっちにもあっちにもその氣はゼロだ」
「いや、恋愛感情は別にしての話だよ。どんな存在なんだ？」
稔は、腕を組んで考え込んだ。そして、ワインをゆっくりと飲んだ。
拓人は答えを急がせなかった。それで稔はぽつりと言った。
「たぶん、お前にとっての園城に近いのかもな」
　拓人はバーテンにもう一本ワインを開けるように言った。
「俺にとって、そういう女はずっと陽子だった。生まれてからずっと側にいて、三味線の腕を競い合ってきた。小学校でも、夏休みもいつも一緒だった。子供だった頃から、思春期も一緒で、俺が他の好みの女と恋愛している時も、いつも三味線と陽子が大きな存在を占めていた。かわいい子と付き合って、別れて、その存在が消え去っても、常に陽子だけは変わらない存在だった。でも、俺が航空券をバラバラに引き裂いて捨ててしまった時に、俺はあいつの存在を捨ててしまったんだと思う。その空間は、一人で放浪している間中、いつもぽっかりとあいていた。そこに、お蝶と、プラン・ベックとテデスコが入り込んできたんだ。酒を飲んで、馬鹿な事をいいあって、音楽や理想や思い出や行き先について語り合ったり、意見を本氣で戦わせたり、弱っている時には手を差し伸べたりさ。そういうことをごく自然にできる相手って、そんなにいるもんじゃないだろう？」
「そうだな」
拓人は、ゆっくりとグラスを傾けた。本当にうらやましいほどの友情だった。
「その中でも、お蝶はもちろん特別だ。あいつは無茶苦茶だし、ウルトラ勝手だ。かわいげのまるでないトカゲだ。だけど、自分の痛みや苦しみを武器にしたりしない。強靭でしなやかな生命力のお化けだ。言う事はきついが誰よりも信頼できる。俺の事も戦友みたいに信頼してくれている。一年ちょっと前まで、ほとんどしゃべった事もなかったなんて、信じられないくらいだ。俺はたぶんあいつのためになら何でもする。たぶん自分の好みのカワイ子ちゃんとのデートを放り出してでも、あいつのために走るだろうな。すごく変だけど、お前にはわかるだろう？」
　拓人は頷いた。これなら安心だ。たとえ、蝶子があのドイツ人の正体を知って、人間不信に陥るほどのショックを受けるとしても、稔が蝶子を支えるだろう。恋愛感情の有る無しは関係ない。そんなものはどうでもいいことだ。
　拓人自身も蝶子を女として愛しているわけではなかった。だがやはり特別な存在だった。ちょうど稔をただのかつての同窓生として以上に信頼しているように。そして、拓人は同じ感情をヴィルに対してすら持っていた。それは音楽が結びつけた感情だった。稔の奏でる三味線が、ヴィルの弾くピアノが、蝶子が吹くフルートが、拓人には真耶

の響かせるヴィオラの音と同じ尊敬を呼び起こした。ヴィルのやっている事は褒められた事ではない。けれど、拓人はヴィルがそのフェアではない自分の行為に対して、既に十分すぎるほどの罰を受けている事を知っていた。

「よく泊めてもらえたわね。結城さんって、世界中を飛び回っていて忙しいだけじゃなくて、デートしたい女性が行列して待っているのよ」
蝶子は、買ってきた缶ビールをガイジン軍団に渡しながら言った。
「たまにはオフにしたいんじゃないか？　女の相手って、いろいろと面倒くさいし」
稔は、蝶子が大好物のシュウマイを取り出したのを見て、氣もそぞろになって言った。
「ヤスとは違って結城さんはそういうことが苦にならないのよ」
お前の事を心配して、わざわざ時間をとったみたいだぞ。稔はそう言いたかったが、ヴィルがいたので黙っていた。その代わりに機関銃のごとき箸使いでシュウマイをぱくぱく食べた。
「ちょっと！　一人で食べちゃうつもり？」
「直に車内販売が来るからまた買えばいいよ」
「これ、日本料理ですか？」
レネがおずおずと手を伸ばした。
「シュウマイは本来は中華料理だよ。こっちはさきいか。お、柿ピーもあるぞ。よくわかってんじゃん、お蝶。日本のものだけど、料理って言うよりつまみだな。俺たちみたいに飲んで騒ぐやつらの食いもんだ」

ヴィルはヱビスビールに満悦して、窓の外を眺めていた。

厳島、海つ路

「あの島に渡るんじゃないのか？」
ヴィルが訊いた。四人は厳島を臨む宮島口に来ていた。ガイジン二人も知っている海の中の大鳥居が見えている。
「その通り。でも、ちょっと寄り道しようぜ。お蝶がこの店に煩悩しているんだとさ」
稔が、船着き場の近くにある穴子料理の有名店を指した。
「人が並んでいる」
レネは目を白黒させたが蝶子はひるまなかった。
「こんなに行列が少ないのは、お昼時じゃないからよ。ねえ、いいでしょう」
　運がよかったのか、五分も待たずに四人は座れた。ガイジン軍団が何かを言い出す前に、蝶子は素早く白焼きと一緒に日本酒を頼んだ。酒さえあればともかく二人は黙るのだ。
「穴子ってなんですか？」
「うなぎの仲間だよ」
「えっ」
レネは青くなった。レネにとって鰻とは、まずくてしかたない魚料理の代名詞だった。
「大丈夫よ。イギリス人と日本人は調理方法が違うの。そんなにまずくないから、たぶん……」
蝶子がウィンクした。
　他には何もないレストランなので、レネは覚悟を決めた。そして出てきた白焼きにおそるおそる手を出した。
「あ、美味しい」
レネは目を丸くした。香ばしい上に、わさびと塩というシンプルな味付けが素材を引き立てていた。ヴィルもついに完全に魚嫌いを克服したようだった。日本酒との組み合わせを堪能している。周りの客たちが、その四人を遠巻きに興味津々で見ていた。
やがてあなご飯が運ばれてきた。稔は大喜びでかき込んだ。
「本当に美味いよな、これ。噂には聞いていたけれど」
「そうでしょう？　ここに来るんなら食べないなんて考えられないわよね」
蝶子も大喜びだった。一方、ヴィルは首を傾げていた。レネも不思議そうな顔をして食べていた。
「美味しくない？」
蝶子が訊くとヴィルは答えた。
「美味いけれど、なぜ甘いんだ？」
稔と蝶子は顔を見合わせてから吹き出した。
「そうか。ガイジンには新鮮だよな。日本料理にはこういう甘辛味のものがあるんだよ」
「そういえば、西洋料理にはこういうのなかったかしらね」
「あれは、どうして海の中に立っているんですか？」
船は厳島にぐんぐんと近づいていた。レネは大鳥居を指差して訊いた。
「あれはねぇ。神道のシュラインに入るための門なのよ。で、普通、シュラインは建物なんだけれど、ここは島そのものが信仰対象なの。だか

ら島の手前に門があるってわけ」
「島そのもの？　シントーは自然崇拝なんですか？」
「日本人の考え方では、何にでも神が宿るんだ。古木の生命力を信仰する事もあれば、コメ一粒の中にも神が宿るってね。だけど自然そのものでなくて名前のある人間みたいな神様もいっぱいいる。ギリシャ神話みたいにエピソードのいっぱいある神様もいるんだぜ」
稔が説明したが、レネはますます混乱するようだった。
「馬鹿みたいに思える？」
蝶子はヴィルに訊いた。理詰めのドイツ人にはついていけない感覚ではないかと思ったのだ。
「あんたたちは、その神様のエピソードが実際にあったと信じているのか？」
「まさか」
蝶子はびっくりして言った。ギリシャにだってゼウスだのアフロディテだのを信じている人なんかいないだろう。
「信じていないのに、祈るのか？」
「エピソードに祈るわけじゃないわ。でも、何百年も生きてきた大木や、千年以上前に名工が掘り出した仏像や、自分たちがどうにも出来ない運命を司るぼんやりとした存在に、尊敬の氣持ちと願いを込めて手を合わせるの。その他にも、今日も無事に生きられてご飯が食べられます、おいしいお酒が飲めますって感謝したりね」
「なるほど」
　ヴィルはわかるとも下らないとも言わなかった。ヨーロッパで信じられている馬鹿馬鹿しい事、例えばイタリアの街に聖母マリアの家が空を飛んでやってきた、などという伝説には理路整然と反論する事が出来る。だが、今日、うまい酒が飲める事に感謝するのに反対する必要があるだろうか。
　蝶子は、海をわたる潮風を受けていた。コルシカフェリーの上でフルートを吹いていたとき、海は冷たかった。どこに行くのかわからず、何をしていいのかもわからなかった。広い世界にひとりぼっちだった。次に海を渡ったのは、アフリカ大陸への小旅行だった。あの時のメンバーが、いまここにいる。地中海が瀬戸内海に変わっても、いつも一緒にArtistas callejerosの仲間たちがいる。これほど感謝したくなる事があるだろうか。蝶子はフルートの入った鞄をぎゅっと抱きしめた。

　稔がインターネットカフェで予約したのは、本来ならばとても四人が泊まれるような旅館ではなかった。だが、インターネット限定プランが直前価格で激安になっていたために、一人頭で割ると朝食付きなのに素泊まりの安宿よりも安くなったので、迷いなくそこにしたのだ。それは、厳島の中にある評判のいい旅館で、頼んだのはベッドが二つと、布団を敷ける和室が一体になった広い部屋だった。
「旅館を体験できるいいチャンスだろ」
「ついでにお部屋での食事も頼んじゃえば？　滅多にできない体験づくしで」
「そうするか。部屋で飲みまくるのもいいよな。よし、ヘビ女に返してもらった金はここで遣おう」
「あら、私たちもちゃんと出すわよ。この旅行、思ったよりも全然お

金遣っていないし」
「いいんだ。部屋代は割り勘にするけど、ここの酒と飯は俺におごらせてくれ。お前たちが来るって決めてくれなかったら、今でも俺はヨーロッパで家族の事を悩んでいただろうし」
　そして、稔はその旅館に二泊する予約をしたのだ。

　船着き場から、島の中心の方に歩いていくと、鹿の集団が餌を求めてまとわりついてきた。ようやく梅雨が明けて、夏らしくなってきていた。したたる緑の彼方から蝉がうるさいほどに鳴いている。
「この暑さと湿氣！　忘れていたわ。これが日本の夏だったわね」
蝶子はうんざりして言った。
「この湿氣は雨が降っていたからじゃなかったんですね」
レネが汗を拭きながら言った。
「海のせいなのか？」
ヴィルの疑問には稔ははっきりとは答えられなかった。
「海辺じゃなくても湿氣はあるよな。冬は乾燥するし。わかんねえや」
「やっぱりヨーロッパの夏の方がずっと快適よね。それでも、ここは都会じゃない分、少しは涼しいはずなのよね」
蝶子がいうとレネが訊いた。
「どうしてですか？」
「都会だと、どの建物も冷房するから、そのぶん外が暑くなるんだ」
稔がそう答えた時に、蝶子が旅館の看板を見つけて歓声を上げた。
　一歩旅館の中に入ると、冷房が効いていた。入り口では従業員が深々とお辞儀をしたので、レネがびっくりして後ずさりをし、稔と蝶子はその様子を見て笑った。チェックインが済むと仲居に案内されて四人は部屋に向かった。荷物を持とうとした仲居に、レネとヴィルはびっくりして断った。従業員とはいえ若い女性に荷物を持たせるなどという事は、彼らにはあり得ない事だった。稔も笑って断ったが、仲居が本当に困っているので蝶子は自分の荷物を渡した。
　旅館の滞在は、ガイジン二人にはカルチャーショックの連続だった。お茶を淹れてくれ、館内の案内と浴衣や手ぬぐいなどの説明をにこやかにしてくれた仲居が、夕食の時も部屋にサービスに来ると聞いて耳を疑った。食事の前にひと風呂浴びようと、稔と蝶子は二人を連れて大浴場に向かった。
「女性とは、別れているものなんですか」
レネは入り口を見て、がっかりしたように言った。
「当たり前だろ。全裸で入るんだから、一緒に出来るか」
「ええっ。全裸？　でも、知らない人もいるのに？」
「慣れれば何ともなくなるわよ、じゃあ、あとでね」
蝶子は嬉々として隣ののれんをくぐって消えた。
　露天風呂に入るのは十年ぶりぐらいだった。蝶子は蝉時雨に耳を傾けながら、思う存分手足をのばして、久しぶりの温泉を心ゆくまで堪能した。竹垣の向こうからは、英語で騒ぐ声が聞こえてくる。
「え。だって、外ですよ」
「そうだよ。さっさと入れよ。おっと、その手ぬぐいはお湯に入れちゃダメなんだ」
「はあ。えっ、熱いじゃないですか」
蝶子は声を立てて笑った。さぞかし周りの日本人たちは奇異な目で見

ている事だろう。
「おい、お蝶。何笑ってんだよ」
稔が竹垣越しに声をかけた。
「大変だろうなと思って。何もかもはじめてでしょう、その二人」
「ブラン・ベックがまだ入ろうとしなんないんだよ」
「テデスコは？」
「平然と入っているぜ」
「本当に熱いな、このお湯」
案の定、文句を言っている。蝶子は爆笑した。稔たちの周りの男性客だけでなく、いまや蝶子の周りの女性客も遠巻きに見ていた。
「真冬に、露天で雪見酒飲んだら美味しいでしょうね」
蝶子がいうと稔は叫び返した。
「よし、次回は冬に来ようぜ。それで、露天の部屋風呂のある宿にしよう。感じでないけど海水パンツ着てさ」
蝶子は笑った。日本に再び来るかどうかわからないけれど、その時はまたこの四人だといい、そう願って。

蝶子が部屋に戻ると、間を置かずに稔たちも帰ってきた。
「浴衣を着せるのもまた一苦労だったんだぜ」
蝶子は感心して三人を見た。
「悪くないじゃない。似合っているわよ、二人とも」
レネとヴィルは黙って顔を見合わせた。まんざらではない。
「でも、ヤスは本当に板についているわねぇ」
蝶子はため息をついた。単に日本人として浴衣が似合うというだけではなく、その着崩し方までが自然でいなせだった。蝶子は改めて稔が邦楽家であることとを思い出した。
「当たり前だ。俺はこういうのを着て育ったんだ。でも、お蝶も粋だぜ」
「そう？　ありがとう。浴衣って、このくらい衣紋を抜いていいんだったかしら」
「ああ、だが、髪はアップにしろよ。そのほうが色っぽくなるからさ」
稔はウィンクした。あまり色っぽすぎても困るけどな、そう心の中でつぶやいた。

仲居がどんどん食事を運んできた。
「お料理の説明をさせていただきます。季節の先付はサーモンとすり身の寄せものでございます。お造りは鮪とイカとカンパチになります。こちらは茶碗蒸しでございます。焼物は生帆立貝柱バター焼、揚物は鱧とお野菜の天麩羅でございます。こちらのお一人様用の鍋は和牛のミニステーキの野菜添えでございます。固形燃料の火が消えるまで、蓋を開けないようにお願いいたします。白飯と香の物、最後に水菓子となります」
一氣に言われた説明を、蝶子と稔は放心して聞いていた。ヴィルとレネは通訳を待ったが、稔は簡単に言った。
「あ〜、魚と野菜と肉だ。食う時に訊いてくれ。憶えている限り説明するから。とにかく乾杯するか」
飲み放題コースを頼んでおいたので、四人はスペインでのペースで飲みだした。

「なんてきれいなんだろう。これ、食べるの、もったいないじゃないですか」
レネがいちいち感心していった。
「作るのは大変だけれど、食べるのは一口よねえ」
蝶子が先付けをつるりと食べていった。
「魚ばっかりだけど、大丈夫か？」
稔はヴィルに訊いた。
「生なのに、まったく生臭くないな。この変な草以外」
そういって海藻をよけた。
「これは確かにハードル高いわよねぇ」
蝶子は熱燗をヴィルの盃に満たして笑った。
「このキモノコスチュームを着ると二人とも急に変わるんですね」
レネが言った。
「どう変わった？」
自覚のない稔は蝶子と顔を見合わせた。
「動きが、柔らかくなっている。力も抜けているな」
ヴィルが言った。稔はどっしりと安定してリラックスし、蝶子は柔らかく色っぽくなっている。酒を注ぐときも片方の手が袖を押さえる。それがとても美しい。ヨーロッパではほとんど男性に酒を注がない蝶子は、ここ日本では率先してその役目をし、反対にヨーロッパではマメな稔はほとんど何もしなくなる。彼らは今、日本人の男女に戻っているのだ。

朝、目を醒ますと蝶子と稔がいなくなっていたので、レネはキョロキョロと見回した。部屋の窓辺に座っていたヴィルが言った。
「温泉に行っているよ」
「またですか？」
「朝に入るのは格別なんだそうだ。俺はシャワーで十分だから遠慮したがな」
ぼーっとしていると、昨日の仲居が入ってきた。
「おはようございます。お食事の用意ができています。食堂へどうぞ」
もちろん二人は何を言っているのかわからない。片言の英語で意思の疎通をしようとする仲居の相手をしている所に、稔と蝶子が相次いで帰ってきた。仲居は心からほっとしたようだった。
朝食の内容にガイジン軍団はまたしても目を白黒させた。
「魚？　朝から？」
稔と蝶子はほらきたという顔をして笑った。
「今日と明日だけだから、日本の朝ご飯を堪能してよね」
「あとの宿は素泊まりにするから、喫茶店とかで洋風のものが食べられるしな」

朝一番で、四人が行ったのは厳島神社だった。朱色の柱の鮮やかな回廊、海の上に張り出す舞台。そのエキゾチックさに感動していた上、歴史についての説明を聞くと、ますますレネは興奮した。ヴィルは台風で何度も壊れた神社がその度に再建されてきた事に興味を持ったようだった。
それから四人は大層心惹かれるものを目にした。奉納された酒樽の山だった。

「昨日の酒は美味かったな。今夜もあれを頼めるのか？」
ヴィルの問いに稔は大きく頷いた。
「飲み放題にしおいて大正解だったな。旅館の方は迷惑かもしれないけれど、二晩だから、いいだろう」
「午後はどうするんですか？」
レネの問いに蝶子は地図を見ながら答えた。
「裏の方の山をハイキングできるみたいよ。暑いからイヤというなら、旅館にいてもいいけれど」
「冷房の中だけにいるのも体に悪そうだよな」
稔が言うとヴィルも頷いた。
「汗をかいたら、また例の風呂に入ればいいんだろう」
「温泉、好きになってきたの？」
蝶子はおもしろがって訊いた。
「あの熱い湯から出ると、暑さが氣にならなくなる」
稔と蝶子はゲラゲラ笑った。

京都、翠嵐

「ヤス！　三味線！」
蝶子がそう叫ぶと、稔の肩から三味線の入った袋が奪い取られていた。そして何が起こったのか把握する前に上から水が降ってきた。
「うるせえ。この毛唐ども！」
上から、怒号が聞こえて、ぴしゃりと窓が閉められた。
　四人は京都の西陣の近くを歩いていた。『鰻の寝床』というにふさわしい京町家がたくさんあったので、物珍しさも手伝って冗談を交えながら楽しそうに話していた。ただ、そこは本来は観光客の見て回るようなところではなかったらしい。しかも、その家では夫婦喧嘩の真っ最中で、亭主の機嫌の悪さは並大抵でなかった。だいたい亭主は京都人ではなかった。氣の短い江戸っ子だろう。
蝶子はかなり離れたところからひらりと戻ってきて、稔にまったく濡れていない三味線の袋を返した。それから突然の襲撃に呆然としている三人を見てけたけたと笑った。
「なによ、あなた達、水をかけられた事ないの？」
みごとに蝶子はどこも濡れていなかった。水がかかる前に素早く安全な場所に逃げたのだ。
「お前はあるのかよ」
濡れた背中を氣にしながら、稔は言った。
「ありますとも。何度も。真冬にもね」
「なんですって。どうしてそんなことに？」
レネは自分が濡れて惨めな氣持ちでいる事もすっかり忘れて訊いた。

「私ね。家で練習するの、禁じられていたのよ。日本の家屋事情を考えたら、しかたないわよね。でも、練習しないとどうしようもないじゃない？　だから、近くの原っぱに行ってそこで吹いていたのよ。その前にある家にしてみたら迷惑だったでしょうね。それで、よくうるさいって言って、こういうバケツの水が降ってきたものよ。一度なんか、バケツごと落ちてきたから、危うく怪我するところだったわ」

蝶子は笑ってその話をしていたが、稔は、その時の蝶子の惨めさを思ってやるせなくなった。大学時代、蝶子は練習をしてこないクラスメイトにひどく辛辣だった。稔は邦楽科だったが、ギター好きが高じてアンサンブルの授業を受講し、そこで蝶子と一緒になった。一人や二人の練習不足のために授業が進まないと、みんなは迷惑そうに眉をひそめたが、本人に激しく抗議したのは蝶子一人だった。

「おお、怖い」

そういって、舌を出していたクラスメイトは、夏の間はハワイの別荘でサーフィンをして過ごすと自慢していた裕福な家の一人娘で、親にすべての授業料を出してもらい、卒業後は親の関係する学校で教職に就いた。いつもどこか構内でフルートを吹いていた蝶子に「あてつけみたいで、嫌みよね」と言ったあの女は、きっと知らなかったのだろう。稔も知らなかった。蝶子には心置きなくフルートを練習する場所が他のどこにもなかったのだ。練習できる場所があるから、どうしても大学に入りたかったのだ。

「さ。日光にあたって乾かしなさいよ。どこに行く？　京都御所？　それとも北野天満宮？」

「そういう目的で行くところか？」

ヴィルが言った。

「なんで、お前、ほとんど濡れていないんだよ」

稔はヴィルに抗議した。

「一番、手前にいたからだ。運が良かったみたいだな」

一番運がなかったのはレネだったらしい。ほとんどびしょぬれだった。

「カードは大丈夫？」

蝶子は訊いた。確認したところ、全部プラスチックの箱の中に入っていたので、ほとんど被害はなかった。ただし、ハンカチ類や布でできた花などは全部濡れていた。

「これ、みんな干さなきゃダメですね」

稔は蝶子が三味線を守ってくれたその判断に感謝した。

「金閣寺まで歩いていこうぜ。この暑さなら服は直に乾くだろ」

稔がそういうと、レネのハンカチを数枚荷物に掛けて干しながら歩き出した。ヴィルも黙ってやはりレネの手からハンカチ類を取ると、同じようにして歩き出した。蝶子は花を受け取って荷物に刺した。レネは嬉しくなってニコニコして後を追った。

「金ぴかだ……」

今まで見てきた日本の寺社とはひと味違う派手な建物に、レネは呆然とした。

「あれって削り取ったら、本物の金なんでしょうか」

「さあな。本物だったら、もうなくなっているんじゃないのか？」

稔が答えると蝶子が説明書きを読んで訂正した。

「本物だって。二十四金。ただし金箔だそうよ。つまり表面だけ」

「世界遺産だからな。削り取ったりしていると、フランスのニュースになるぞ」
　稔がウィンクした。
「一度燃えたんだろう？」
ヴィルが訊いた。
「そうなの。放火よ」
蝶子は言った。学僧の放火の動機について、蝶子はどこかで読んだ事があった。自分へのコンプレックスと拝金主義に陥った寺への嫌悪感、母親の過大な期待に対するストレスに、結核への恐怖と統合失調症……。犯行後わりと直に亡くなってしまったので、未だに確かな事はわからない。世界的に有名な寺が焼け落ちるのを見ながら、彼はどんな事を考えたのだろう。逮捕後ショックを受けた母親が事情聴取の帰りに投身自殺をしたと聞いた時、彼は何を思ったのだろう。
「池に映っているのを逆さ金閣って言うんじゃなかったっけ」
稔が覗き込んだ。
「そうそう。修学旅行で絵はがきと同じ写真を撮ろうとしたわ。人がいっぱいいるから、同じになんか撮れっこないんだけど」
蝶子は、葉書を買った。後で真耶に送るのだ、いつものように。
　大徳寺の高桐院に行きたいと言い出したのは稔だった。
「何があるの？」
「庭の眺めがすばらしいんだ。離れていれば行かなくてもいいけれど、この距離なら行きたいよ」
「行くのは意義なしだけど、この暑さの中また歩くのは勘弁。バスを使いましょう」
　蝶子はさっさとバス停に向かった。稔はレネにウィンクした。
「大徳寺の裏手に今宮神社ってのがあって、美味いあぶり餅が食べられるんだぜ」
「甘いんですか？」
「甘いよ。白みそのたれだ」

　高桐院に一歩足を踏み入れると、それは別世界だった。
「誰もいない」
　レネがキョロキョロした。金閣寺にはあれほどいた観光客たち、キャーキャー騒ぐ女学生たち、ちらほら見た外国人たち、すべてが姿を消していた。大徳寺前のバスで降りた人はいたし、高桐院は有名なので誰もいないなどという事は想像もしていなかった蝶子と稔も訝しげに周りを見回した。
　緑色の静謐なる世界だった。先程と変わりないほど蒸して暑いはずなのに、風が竹林を吹き抜けてさらさらと音を立てると、蝉の声までもが遠くなり、まるで別の世界に来たようだった。石畳の参道の左右に広がる鮮やかな苔、竹で出来た欄干、人の手で作られたものなのに、この庭はどこか自然の支配する神聖な趣があった。
　拝観料を払う窓口に来ると、中には一人の老人がいた。目があるのかどうかわからないほど細い目をさらに細めているので、寝ているのではないか、もしかしたら石像なのではないかと錯覚するほどだったが、しっかりと四人分の拝観料を請求してチケットを切ったのでやはり人間だったのだと納得した。

暗い院内から庭を眺めると風景を額縁に切り取ったようだ。蝉の声、風の音、畳の上で動く誰か、それ以外は何も存在しなかった。
中庭に出て、歩いている時にレネが言った。
「モネや他の芸術家が日本に惹かれたのがようやくわかりましたよ。でも、彼らの作り出したものからは、この世界はとても想像できませんでしたね」
茶室を見た後、もとの参道を通って高桐院を後にした。翠のうねりが風に揺らされて四人を異界へと誘い続けている。ここは、本当に現代の日本なのかと訝しく思う。出口で笑い転げる女学生たちとすれ違った。四人は顔を見合わせた。ようやくどこか幽玄な世界から戻ってきたのかと疑いながら。

「ほらこれがあぶり餅屋だ」
稔は、今宮神社の参道にある二軒の店を示した。
「どっちが？」
「あれ？　こっちは元祖で、こっちは本家？」
わからないので、二人ずつそれぞれの店で買ったが、本数も値段もまったく一緒だった。味も、四人に違いはわからなかった。一人分が小さな餅十五本なのだが、レネは大喜びで食べ、さらにヴィルと稔から十本ずつもらっていた。

「そういえば石で出来た波紋の庭のある寺は、この近くにあるのか？」
ヴィルが訊いた。以前に雑誌で見た事があり、日本にいるなら一度見てみたいと思っていたのだ。蝶子が大徳寺の観光マップを見て頷いた。
「さっきいた大徳寺の、まだ見ていない塔頭のうち、興臨院や瑞峯院には枯山水があるみたいね。私も見てみたいわ」
四人は大徳寺の境内を通って歩いていった。瑞峯院の枯山水を眺めているうちに、稔が言った。
「ああ、三味線が弾きてえ」
「弾くのはだめなのか」
「一応、お寺だからな。許可なく弾くわけにはいかないよ。外ならいいかもしれないけれど」
「出雲で弾くんでしょ」
「そうだな。俺、やっぱり日本人なんだな。こういう光景を見ているとたまんなくなる」
「そうね。私たち、ようやく祖国に帰ってきたのかもしれないわね。もともと京都にはまったく縁がないとしても」
縁側に腰掛けてぽつりと語り合う二人をヴィルとレネは黙って見ていた。

出雲、エレジー

「ここ？」
バスを降りて蝶子はあたりを見回した。蝉時雨の音が激しい。これほど蒸し暑い氣候なのに不思議な清浄さを感じさせる。しかし、その第一印象とは対照的に、何もない退屈な村に見える。
「みたいだな」
稔は答えた。
「なんというか、その、ひなびた所ね」
蝶子は言葉を選びつつ言った。
　稔もべつにこの村に思い入れがあった訳ではない。ガイジン軍団に日本を見せるなら、京都、安芸の宮島、日光東照宮、それに出雲ぐらいは基本かと思ったのだ。新堂沢永和尚と名酒『不動』を酌み交わしている時にそんな話をしたら
「出雲に行くのか」
と、身を乗り出してきたのだ。
「出雲市からバスに乗って一時間もかからない、樋水村というところがある。樋水龍王神社という由緒ある神社があってな、そこに立ち寄ってくれんか」
「そこで誰かに逢えばいいのか？」
「いや、ご神体の瀧のある池で、三味線を弾いてほしいんだ」
「何のために？」
「その神社には千年前の悲恋の伝説があってな、その二人のためにってことにしておこうかな」
「じいちゃん。そんなこと本氣でいってんのか？」
「まあ、いいじゃないか。こっちは老い先短いんだ。多少のわがままはきいてくれないと」
「そりゃ、いいけどさ。本当にその千年前の恋人たちのためになんか弾けばそれでいいのか？」
「そうだ。向こうには連絡しておくから」
「なんだよ。じいちゃん、そこの人たち知っているのか？」
「行けばわかる。過疎の小さな村だ。外国人を二人も連れていれば、向こうがすぐに見つけてくれる。お前らは、そのくらいの寄り道をする時間の余裕はあるんだろう？」
「もちろんだよ。でも、その村に泊まるところとかあるのかな？」
「その心配はせんでいい。わしが頼んでおくから」
　バスが行ってしまったので、四人はバス降車場を離れて、参道を正面に見えている、村の規模に比べてやけに大きくて立派な神社に向けて歩いていった。
『大衆酒場　三ちゃんの店』というのがあった。なんだこりゃ。ド田舎の酒場だよ。食事をするにもこんなところしかないんじゃないか？
　ガイジンつれて騒いだら、そうとう浮くな。村人が買い物をするのであろう小さな用品店、流行のかけらも感じられない衣料店、それに観光客目当てと思われる土産物屋などが続く。ヴィルとレネは面白そうに見ていたが、蝶子と稔は困って目を見合わせた。
「あら？　ここはちょっとまともそう……」
蝶子が足を止めたのは『お食事処　たかはし』という看板の出ている

店だった。黒と木目を基調としたシックなインテリアにも好感が持てたし、表に出ている本日のメニューにも心惹かれた。
「車海老と帆立貝のマリネ、アーティチョークのサラダ？　こんなところで？」
稔も首を傾げた。それを中から目を留めた女性が出てきた。
「いらっしゃい。あら？　ガイジンさん二人……。ってことは、もしかしてあなたが新堂の和尚さまのご親戚の稔君？」
稔はびっくりした。じいちゃんが連絡しておくって言ったのは、この人か？
「そうです。はじめまして」
「お待ちしていました。私は高橋摩利子。どうぞ、中に入って」
都会的できれいな女性だった。蝶子や稔の両親くらいの年齢なのだろうが、日本人には珍しいくらい現役感を醸し出している女性だった。この村にはまったくそぐわない。関東の人だろう、言葉のイントネーションでわかる。
「田舎でびっくりしたでしょう？　私も初めてきた時には絶句したわ」
摩利子はにっこりと笑った。
「紹介します。俺の大道芸人の仲間で、こちらは蝶子、ドイツ人のヴィル、フランス人のレネ。お世話になります」
「よろしくね。今、買い物に行っているけれど、すぐに主人も帰ってくるから。二階に娘たちが以前使っていた部屋があるの。そこに泊まって。男三人だとちょっと狭いけれど……」
「私たちいつもドミトリーに泊まっているので、べつに二人ずつでもいいんですけれど」
蝶子が言った。摩利子は目を丸くしたが、高らかに笑った。
「好きにするといいわ」
それで、稔と蝶子には摩利子が常識にとらわれない豪快な性格であることがわかった。
「ここ、旅館じゃないですよね。お礼はどうしたらいいでしょうか」
蝶子は単刀直入に切り出した。
「あら、水臭いこと言わなくていいのよ。和尚さまの御用でここにきたんでしょ？　どんなことでも協力するわ。主人は連絡がきてから大興奮していたのよ、まだかまだかってうるさいぐらいにね」
　ということは、この人たちは『新堂のじいちゃん』とかなり親しいんだな。少し事情を訊いておこう、稔は思った。
「あの……。じいちゃんは行けばわかるとしか言わなかったんですが、この村とじいちゃんって何の関係があるんですか？」
「やだ、稔君知らないの？」
「何をですか？　神社の池で千年前の恋人たちのために三味線を弾けって、わけのわからないことをいわれただけで、さっぱり……」
摩利子は呆れた顔をした。
「和尚さまの息子の朗さんが、この神社の禰宜だったのよ。私と主人の一は、新堂さんと奥さんのゆりさんの親しい友達なの。二人とも四半世紀以上行方が知れないんだけれど。だから、和尚さまは二人のために三味線を弾いてほしいんだと思うわ」
『新堂のじいちゃん』に昔行方不明になった息子がいるという話は、子供の頃に聞いたことがあった。だけど、なんではっきり言ってくれな

いんだよ。
「ここで行方不明になったんですか？」
稔の言葉に摩利子は頷いた。
「龍王の池ってのは？」
「お社のご神体は樋水川そのものなのよ。で、瀧壺の底にはその化身である龍がもう一匹の蛟といっしょにとぐろを巻いているんですって。池のほとりの家に、私の娘夫婦が住んでいてね。その家には、かつて新堂さんたちも住んでいたの。だから、そこで三味線を弾いてあげて」
「わかりました」
　千年前の恋人とか、何でまどろっこしいことを言ったのかなあ？
失踪ってキーワードが俺にはＮＧだと思ったのかな？
「私もフルートを吹いていい？」
四人で、神社に向かっている途中で、蝶子が言った。
「もちろん。失踪者ってキーワードに共感したのか？」
「ううん。息子のためにってキーワード。私はアーデルベルトのためにフルートを吹きたいの」
「アーデルベルト？　誰だよそれ」
稔とレネは疑問符でいっぱいになった。ヴィルは不意打ちに衝撃を受けたが、幸い三人はそのとき彼の顔を見ていなかった。蝶子は地面を見ながら続けた。
「ヤスのおじいさんは、息子さん夫婦への想いをヤスに託した訳でしょう？　たぶん、もう生きていない大切な人たちへの想いを。私は、不意に親を失ってしまった一人の息子のやりきれない想いのために、弔いの音を奏でたいの」
「その息子がアーデルベルトって名前なのか？」
「そうよ」
「ドイツでの友達か？」
「会ったことない人なの。向こうは私には会いたくないでしょうね。お母様が亡くなったのは私のせいだから」
稔とレネは固まった。蝶子はそれ以上を話そうとはしなかった。
「こんにちは。母から連絡を受けています。私は娘の瑠水です」
神社の境内に入ると、松葉色の袴を身に着けた小柄な女性が笑顔で挨拶した。うわ、かわいい。稔はどきどきした。への字型の眉毛のせいで、笑っているのに泣き出しそうな顔に見える女性で、それがとてもはかなげに見えたのだ。人妻かあ、惜しい。
「ヤス、手水の取り方知ってる？」
「う……。ちょっとあやしい、お前は？　お蝶」
「だめよ、全然。その手の常識に欠けてて……」
その会話を聞いて、瑠水は微笑むと、一緒に行って手水の取り方を実践してくれた。稔と蝶子が手水をとっているのを見て、ヴィルとレネは困ったように顔を見合わせた。
「ああ、ガイジンはやらなくてもいいんじゃないか？　だめですか？　瑠水さん」
稔は瑠水に問いかけた。
「宗教上の理由でなさらない方もいれば、単にご存じなくてなさらな

い方もいますわ。私は尊敬の氣持ちさえ持っていただければ、かまわないと思うんです。宮司には内緒ですけれど……」
瑠水の笑顔に稔は顔がにやけるのが止まらなかった。
「これが伝統なのか？」
ヴィルが訊いた。
「神聖な場所で何かをする前に、自分を清めるの。それが日本の考え方の根本でもあるのよ」
そういうことならと、ヴィルもレネも見よう見まねで手水をとった。
「拝殿でお参りした方がいいのかしら？」
蝶子が勝手が分からずに訊いた。瑠水は優しく言った。
「普通の神社や、一般の方の参詣はそうなんですけれど、これから皆さんはもっとご神体に近いところに行かれるわけですから。この神社は少し特殊なんですよ。普通の神社ではご神体は本殿の中にあるんですが、ここのご神体は建物に入りきらないので……」
「瑠水さんはいつ神主になられたの？」
蝶子の問いかけに瑠水はまた笑った。
「まだです。私と主人はまだ見習いの出仕という身分で神職ではないんです」
「それなのに、ご神体のそばにお住まいになっているの？」
「ええ。この神社だけに存在する、ちょっと特殊な役職があって、それで私たち夫婦はここに住むことになっているんです。でも、私たちはまだその役職になりたてで、資格も取っていないので、二人とも前の仕事も兼任しているんです」
「前の仕事って？」
稔が訊いた。
「私は地質の調査、主人は彫刻師です」
「神主さんって、兼業したりするの？」
蝶子は知らない世界のことに興味津々だった。
「事情はあちこちで違いますね。神社の台所事情から兼業せざるを得ない神職の方もいらっしゃいますし。私たちは、まだ神職の世界になれていないんで……」
「お寺の息子が、神主になるなんてこともあるんだね」
稔は訊いた。
「新堂先生とゆりさんは、特別な事情でこの神社にいらしたと伺っています。でも、私が生まれる前のことで、詳しくは存じ上げていないんです」
蝶子と稔は交互にヴィルとレネに会話の内容を通訳した。瑠水は感心した様子でそれを見ていた。
「お二人とも、英語に堪能なんですね」
「まあ、毎日こいつらと一緒にいるから、それなりに上達するんだよ。俺は、学校で習っただけで、本来は英語なんてからきしだったんだけどさ。お蝶はもっと出来がいいぞ。ドイツ語もぺらぺらだし、イタリア語もできるんだ」
「まあすごい」
「八年も外国にいると、簡単に上達するのよ。日本のことは、手水の取り方もしらないんだけどね」
蝶子は自嘲的に言った。瑠水は海外に行ったことがなかったし、こんな近くで外国人を見たこともなかった。こういう組み合わせのグルー

プがしょっちゅう訪ねてくるわけではないので、興味津々だった。
「蝶子さんがお持ちになっているのも、楽器ですよね」
「ええ、フルートよ。私もお許しがいただけたら吹かせていただこうと思って」
「まあ。主人が早く帰ってくればいいのに。私たち二人ともクラッシック音楽の大ファンなんです」
「そうなの？　だったら、どこかにピアノがないかしら。この人はとてもピアノが上手なのよ」
そういってヴィルを示した。
「ピアノ、うちの居間にあります。たいしたことのないアップライトピアノですけれど、本当に弾いていただけますか？」
「弾いてくれるわよね？　もっとも、ご神体の側でそんなにいろいろ演奏して宮司さんに怒られるかしら」
蝶子は周りを見回した。
「大丈夫です。習いたての私のひどい練習ですらも、奉納ですからのひとことで済ませていますもの。上手な方の演奏なら、龍王様もお喜びになるわ。たまにはまともな音楽が聴けるって」
蝶子も瑠水が大好きになった。
　瑠水は四人を家に案内した。居間から続く大きな広縁があり、そこから荘厳な池が見えた。緑豊かなすばらしい景色で、一番奥の正面に瀧が涼しやかな音を立てていた。その美しい光景に四人はため息をついた。
「真耶のところもいいけれど、こういうところに住むのも、本当に贅沢よねぇ」
「俺、結城拓人の億ションより、こっちの方が好みだあ」
　蝶子と稔の会話に、瑠水はびっくりして訊いた。
「え？　結城さんと真耶さんをご存知なんですか？」
「知っているも何も、私たち東京に来てからずっと真耶のところに居候していたのよ」
「瑠水さんこそ、あの二人を知っているのか？」
稔も驚いて訊き返した。
「ええ、東京にいた時に……。二人ともお元氣ですか」
「ああ、達者に大活躍しているよ。それにしても君があの二人を知っているなんて、偶然とはいえ、すごい縁だな。世間は狭い」
稔は三味線を取り出しながら言った。それを機に、Artistas callejerosの四人の表情ががらりと変わった。誰も何も言わずに、広縁から池の方をみつめた。瑠水も静粛な心持ちで、四人の後ろの畳に黙って座った。
　蝶子は広縁の上に正座し、外国人二人は腰掛けた。三人に囲まれる形で背筋を伸ばして正座した稔はしばらく全く音をさせずに座っていた。蝉の声と木々をわたる風の音、そして途切れなく響く瀧の水音だけがあたりを支配した。
　やがて稔は静かにバチをとると力強く弾き始めた。誰も何という曲か知らなかったが、強く哀切のこもる曲で、ヨーロッパでは一度も聴いたことのない音色だった。それは陰調の『あいや節』だった。空氣が震えた。木々が稔のバチに合わせて身をしならせた。龍王の池の水面が狂おしいうねりを見せた。
　蝶子は身震いした。稔が三味線の名手であることはもちろん知って

いた。しかし、彼はそれ以上だったのだ。天才という言葉がしっくりとくる。大道芸人をしているような人材ではないのだ。稔以外の三味線の音を聴いたことのないレネやヴィルにもそれはわかった。

稔は『新堂のじいちゃん』とその息子夫婦のために弾いていた。そして、亡くなった父親と、それを悲しむ母親、弟、そして自分自身のために弾いていた。千年前の恋人たちと日本の心を象徴するようなこの神聖な社の龍のために弾いていた。神秘的な龍の心と三味線の音色が響き合い、出雲の、それから大和の魂となって山の中にこだまする。

ここ日本は俺のルーツだ。この響きは俺の魂だ。そして、今ここにいる三人が俺にとっての現実だ。俺はこいつらと一緒にヨーロッパで生きていく。俺の魂の音を奏で続ける。それが俺の生きていく意味だ。

瑠水は涙を流していた。東京のコンサート会場で拓人の演奏に涙して以来、人の演奏に涙を流したことはなかった。この人は、結城さんと真耶さんと同じ、音楽で奉職する人なのね。この場にいられるなんて、私はなんて幸せなのかしら。

その曲が終わると、稔はやはりしばらく身じろぎもせずにいた。再び風と水と蝉の音だけが空間を支配した。誰も何も言わずにそれを聴いていた。

やがて、稔は蝶子の方を見て微笑んだ。蝶子は頷いて、ゆっくりとフルートを組み立てて立った。透明な細い音が、空に響き渡った。ドボルザークの『我が母の教えたまいし歌』だった。稔の音と対照的な静かで平和な音だった。深い哀切が心に染み渡ってくる。心が痛くなる。失われてもう戻らない人を想う世界に共通した悼みを、切々とした音色が心の奥深くから揺り起こしていく。

蝶子が自分と母親に対してどういう想いを持っていたのか、ヴィルは初めて知った。ヨーロッパの女なら、こんな風に自分を責めることはないだろう。ヴィルにしてみれば、母親が死んだのは父親のせいではあっても蝶子のせいではなかった。父親は四半世紀以上、母親に興味がなかったのだ。しかし、ヴィルはアーデルベルトとしてそれを蝶子に伝えることができなかった。

レネはコルシカフェリーを思い出していた。あのとき自分は彼女を口説くことしか考えていなかった。でも、パピヨンはこんなに重い十字架を背負い、迷い苦しんで泣いていたのだ。あのとき自分が思ったような単純な失恋などではなかった。家族に理解されず、恩師との恋愛沙汰に巻き込まれ、誰かに死なれ、どれほど苦しかったことだろう。それでも蝶子はしなやかで強かった。フルートを吹き続け、人生という旅を休まずに続けている。

蝶子がその曲を吹き終えると、とても短かったので、稔は手振りでもう一曲やれと指示した。肩をすくめると蝶子はヴィルに言った。

「プーランクの『フルートソナタ第二番』の二楽章、一緒に演奏してくれる？」

ヴィルは黙って頷いて、瑠水のピアノの前に座った。前にコモで蝶子と演奏したことがあり、父親に頼まれて何度も伴奏したことがあるので暗譜で弾くのは難しくなかった。だが、穏やかならぬ心をコントロールするのは困難だった。ヴィルの心を乱しているのは亡くなった母親ではなく、いま、その母親のために繊細で類いまれな音色を生み出している蝶子だった。知れば知るほど愛は深まっていく。想えば想うほど、自分の始めてしまった愚かなゲームのために身動きが取れな

くなっていく。そうだ、拓人。こんなことを続けるべきではない。早いうちになんとかしなくては。

蝶子は無心に吹いた。アーデルベルトのために、マルガレーテ・シュトルツのために、それから稔とその父親とのために。失ってしまった祖国への哀歌でもあった。深い信頼と親愛の絆を感じつつも、いつまで一緒にいられるかわからない大切な三人との愛おしい日々に対するオマージュでもあった。

蝶子が終わると、瑠水は次はヴィルだと期待を持った目で見つめた。それで、瑠水には無表情にしか見えないがかなり困っているヴィルに稔は頷いた。仕事で「お前の番だ」という時の頷き方だった。それでヴィルは肩をすくめてショパンのピアノソナタ第一番の第一楽章を弾いた。

ヴィルは自分の母親のために弾いているわけではなかった。ヴィルは稔のために弾いていた。彼の父親のために。彼の親戚の老僧とその息子夫婦のために。レネとその亡くなった妹と暖かい両親のために。蝶子の痛み続ける心のために。Artistas callejeros に加わるようにしむけ、ここに自分を連れてきた不可解な運命のために。そして、成就することのないであろう愛のために。

家の入り口には、仕事から帰ってきた瑠水の夫の真樹が黙って立っていた。三味線の音に驚いてやってきた宮司をはじめとする神職たちも、聴いたこともない見事な奉納演奏の連続に場を離れられずに立ちすくんでいた。

ヴィルの演奏が終わると、三人は必然的にレネの顔を見た。

「な、なんですか。僕は音楽家じゃないんですよ！」

「でも、あんなにいい声なんだもの。何か歌ってよ。教会で歌っていたなら、ちょうどいい曲があるんじゃない？」

レネはしばらく抵抗していたが、蝶子が一緒に歌うことを約束させてようやくヴィルにフランクの『Panis angelicus』の伴奏を頼んだ。蝶子は喜んで歌詞抜きでコーラスを歌った。

『たかはし』で、四人と瑠水と真樹、そして摩利子と一が山崎の十八年で乾杯していた。宿泊は好意に甘えるとしても、底なしに飲むから飲食代だけはちゃんととってほしいと頼み、新堂朗の好きだったというウィスキーで乾杯することにしたのだ。

「残念だわ。ものすごい演奏だったんですって。店を閉めて聴きにいけばよかった」

摩利子がため息をついた。

「プロの演奏と瑠水のが全く違うのはあのピアノのせいだとずっと思っていたんですが、ピアノに罪はなかったようですね」

ふくれっ面をする瑠水の頭をなでながら真樹が言った。

「私は始めたばかりだもの。この人たち、真耶さんや結城さんとお友達なんですって。そういうレベルなのよ。比較すること自体間違っているわ」

「宮司もうなっていましたよ。お社で奉納された演奏としてはこの半世紀で最高じゃないかって」

真樹が言うと一は嬉しそうに頷いた。

「和尚さまにさっそく連絡しなくちゃね」

摩利子は車エビと帆立のマリネを出しながら言った。出た皿はどれも

三十秒以内に空になった。
「ああ、美味しい。この村でこういうものが食べられるとは全く思っていなかったわ」
蝶子はにっこりと笑った。

ヴィルは翌日に瑠水に頼まれてシューベルトの『即興曲』作品九十の第三曲を弾いた。瑠水はこの曲に特別な思い入れがあるようだった。
「いいよなあ。俺もピアノが弾ければ、瑠水さんにあんな風に尊敬してもらえるのに」
稔は悔しそうだった。
「でもそこまでじゃない？　ピアノがどうとかいう問題よりも、瑠水さんと真樹さん、あんなに仲がいいんですもの。ああいうのを見ると結婚ってのもいいなあって思うわ」
「トカゲらしくないこと、いうなよ。不氣味だ」
瑠水はヴィルの音色に、かつての拓人の音色と同じものを感じ取った。CDやコンサート会場で聴く知らないピアニストの演奏では感じたことのない、願いとも痛みともつかない感情がこもっていた。外国人は瑠水にとって異星人と変わらない存在だったが、そうではなかった。昨日はじめて会ったにもかかわらず、瑠水にとって四人はすでに拓人や真耶と変わらぬほどの大きな存在になっていた。音楽は絆として深い心の結びつきをつくることができる。ここが奥出雲で、四人が一ヶ月後には再びヨーロッパに去ってしまうとしても、それは変わらない。お互いに自分にできることを続け、この世界に自らの立ち位置を作り、ひたすら生き続けるのだ。

出発の前に蝶子は龍王の池のほとりに立ってメンデルスゾーンの『歌の翼に』を吹いた。
「なぜかここに立つと、たまらなく吹きたくなるのよね。心の中に幸福な風が吹いてくるみたいなの」
稔にそういう蝶子を摩利子は嬉しそうに見つめた。
「そう、ここはそういう所なの。あなたたちに会えて嬉しかったわ。次に帰国する時も、またぜひ来てね」
瑠水と高橋夫妻に別れを告げると、四人は真樹の運転する車で出雲まで行った。真樹が出雲大社に案内してくれた。真樹は二人の外国人が平然と手水を取っているのに驚いた。
「昨日、瑠水さんに習ったのよ。私たち四人とも」
蝶子がウィンクした。
「これが出雲大社かあ。俺、はじめてなんだよな」
稔が感激の面持ちで言った。
「私もよ。島根県も山陰もはじめて」
「俺は東京にも行ったことありませんよ」
真樹が笑った。
「あら。じゃあ東京に行っていたのは瑠水さんだけ？」
「ええ。だから俺は結城拓人さんのピアノも園城真耶さんのヴィオラもまだ生で聴いたことがないんです。誰かと指定さえしなければ生演奏のコンサートは松江や大阪まで出れば聴けますが、正直言って、CDで聴く演奏よりずっといいって思ったことはなかったんですよ。でも、昨日、ようやくわかりました。皆さんの演奏を間近で聴いて、す

ばらしい演奏を聴くならやはり生の方がずっと迫力があるんだって」
「お二人とも、本当に音楽がお好きなのね」
「ええ、俺たち、音楽を絆に結ばれたようなもんですから」
「ちくしょう、うらやましすぎる」
稔がぶつぶつ言った。蝶子が小声で通訳してレネと二人でくすくす笑った。
　出雲大社は圧巻だった。有名な神楽殿や拝殿の注連縄、深い緑に囲まれた、落ち着いた色彩の社の数々。スケールの大きさに息をのむ。四人の軽すぎる服装では正式参拝は不可能だったので、真樹はごく普通の略式参拝のために拝殿へ連れて行った。レネは大感激していた。なんて壮大でエキゾチックなんだ。
　一方、参拝する日本人三人を眺めながら、ヴィルは一つ疑問を持った。
「あんたたち、京都の寺でも参拝していなかったか？」
「うん。俺、仏教徒だ」
「ここはシントーのシュラインじゃないのか？」
「そうよ。私たち、どっちもありなの。つまりどっちも信じているってこと」
ヴィルもレネもさっぱりわからなかった。
「日本には八百万の神様がいるって考え方があるんだ。だから、出雲の神様もゴータマシッタールダもそれから祈りたければバチカンでも普通に祈るんだよ。どれもありだし、どれも尊重して、どれも信じているんだ。それでいて信じている宗教はないっていうんだよな、みんな」
「そう。神社でお宮参りして、毎年お墓参りして、結婚式はキリスト教式にして、無神論を主張して、困ったら神様助けてって祈って、死んだら仏教でお葬式するのよ」
「なんですって？」
レネが絶句した。キリスト教徒にはあり得ない感覚だった。信仰心がなくて教会から出てしまったヴィルにも全く理解できなかった。シントーの聖職者である真樹までが平然と頷いている。変なやつらだ。

東京、積乱雲

帰る前に浅草が見たいと言い出したのはレネだった。
「ほら、あの、よく見る大きな提灯のかかったところ、あれって東京のどこかですよね」
蝶子はぎくりとした。わざわざ浅草を避けていたのは、稔の生家があるからだ。もちろんレネはそんな地雷を踏んだなんてまったくわかっていない。ところが、当の稔があっさりと言った。
「OK。案内して進ぜよう」
「いいの？」
蝶子が訊くと稔は大きく頷いた。
「今日は三味線をもってくぞ。お蝶、お前はフルートを持って行け。出雲で神社に奉納したんだから、お寺の代表で浅草寺にも奉納しておこうぜ」
「いいわよ。千葉のおじいさんのお寺では弾かなかったの？」
「弾いたさ。空氣でできた三味線だったけどな」
蝶子は笑って頷くと、フルートの入るバッグに取り替えた。

「こ、これです。本当に大きい！」
雷門で提灯を見上げてレネが感激した。稔はそうだろうと、満足して頷いた。浅草寺は浅草っ子の稔の誇りだった。
「いつ見に来たかしらねぇ。一度くらいしか来たことないのよ」
蝶子も感慨深げに見上げた。
「よし、お蝶。日本メドレーだ」

日本メドレーは、二人がピサで演奏し始めたレパートリーだった。『ソーラン節』『早春賦』『花の街』『朧月夜』『赤とんぼ』そして『故郷』と続く。二人は、宝蔵門の脇で本堂に向かって演奏を始めた。道行く人たちは、怪訝な顔をした。しかし、二人の卓越した演奏はすぐに人々の強い関心を買い、あっという間に周りに人だかりができた。
日本で、このメドレーを演奏するとは二人とも思っていなかった。コルシカフェリー以来の一年間が紡ぎだした二人の信頼関係、祖国にいるという思い、そしてヴィルとレネに日本を見せているんだという誇りが二人の氣持ちを盛り上げていた。
演奏が終わると、二人は本堂に向かって深々とお辞儀をしたが、見物客達は喝采を送り、アンコールを要求した。そんなことは全く予想していなかったのだが、せっかくアンコールがかかっているのだからと、二人は『村祭り』を演奏した。
それから、更なるアンコールを求める人々を置いて、四人で本堂に向かった。蝶子と稔はお水舎で手を洗い口を濯いだ。ヴィルとレネは、これなら知っていると多少得意げに続いた。それから稔と蝶子が本堂で鐘をつき合掌するのを見ていた。日本人二人は、階段を下りてきてガイジンたちに仏像の説明や、建物の特徴などを話していた。
視線に最初に氣づいたのはヴィルだった。参道を隔てて反対側、ひっきりなしに通る参詣者たちと対照的に、全く動かないまま四人の方をみて、口元に手をあてて震えている女性がいたのだ。ヴィルの視線を追って、蝶子も女性を見た。急に二人が静かになったので、レネと稔もそちらを見た。稔が驚きの表情を見せた。その途端、女性はあわてて、身を翻して去ろうとした。稔が叫んだ。

「おふくろ！」
稔は人並みをかき分けて、必死に母親を追った。そして、母親を捕まえて固く抱きしめた。
　周子は、一日に何度も浅草寺に稔の無事と幸せを祈りに来ていた。ここにいれば稔と会えると思っていたわけではない。もう、日本にはいないのかもしれないと思っていた。しかし、どこにいようと稔のことを守ってほしい、そう願って仏の前に手を合わせ続けてきた。今日もそのつもりだった。本堂の前に来た時に聴き慣れた三味線の音がした。稔の音だった。そんなはずはないと疑いながら、人波をかき分けて見ると、本当に稔だった。美しい女性が隣でフルートを奏でている。信じられなかった。
　やがて稔と女性、そして二人の外国人は敬虔な面持ちで仏の前に出た。息子が自分と同じように手を合わせている。今日、稔の姿を目にすることができたのはみ仏のご加護だ。そう思うとありがたさに周子は涙を抑えられなかった。一秒でも長く元氣で幸せそうな稔を見ていたい、周子は隠れることも忘れて稔を見つめていた。そして金髪の外国人に氣づかれてしまったのである。
　稔が、母親に追いつき、しっかりと抱きしめた時に、レネは既に号泣していた。眼鏡を外して涙を拭った。
　ヴィルはそれほど親子の対面に心を打たれなかったので、蝶子の方を見た。そして、蝶子の顔に浮かんでいる痛みに氣がついた。
　蝶子は無理して微笑もうとしているようだった。大切な稔のために。けれど、それよりも強い感情、自分には誰も待っていてくれる人がいないという悲しさ、同じ祖国にいても自分には居場所がどこにもないという寂しさが勝ってしまっていた。
　ヴィルは黙って蝶子の手を握った。蝶子の手は一瞬震えた。そして、ヴィルと反対側をぷいっと向いた。自分がどんな顔をしていたのか悟り、それをすぐにヴィルに読まれてしまったことを恥じていた。不意打ちの優しさにむかっ腹を立てた。ヴィルは蝶子が望まなかったのだと思って手を離そうとした。けれど、蝶子はヴィルの手を離さなかった。少し力を込めて握り返した。弱さを知られたのは腹立たしかったが、今はどうしてもこの優しさが必要だった。
　人ごみの中、誰も二人がそうしていることに氣づかなかった。蝶子は反対側を向いたままだった。やがて、稔が母親を連れて三人の元に戻ってくるのが見え、レネが眼鏡をとって目をこすりながら振り向いたので、二人は手を離した。
「紹介するよ。俺のおふくろだ」
稔は、三人に周子を紹介すると、号泣しているレネの頭をはたいた。
「おふくろ、これが俺の仲間だ。この泣いてんのがレネ、フランス人。その金髪のドイツ人がヴィル、そしてフルートを吹いていたのが蝶子だ。俺たち四人、最高のチームなんだ」
「稔が、お世話になっています」
周子は深々と頭を下げた。
　それから周子と四人はゆっくりと参道を歩いて、浅草寺を出た。それから、小さな甘味屋に入ってしばらく話をした。帰り際に稔はもう一度周子を固く抱きしめて言った。
「ごめんよ。おふくろ。俺、わがままを通して」
「安心したよ。稔。元氣でね。また戻ってくる時には必ず顔を見せて

ちょうだいね」

「見ろよ、あの入道雲。日本の夏ってこうでなくちゃな」
稔は晴れ晴れとした顔で遠くに立ち上る積乱雲を眺めた。三日後には再びバルセロナだ。だが、日本への名残惜しさはなくなっていた。
「そうね。夕立がくるわよ。急いで帰った方がいいわね」
蝶子は、稔の感慨には全くつきあう氣がないらしく、いつも以上に現実的な提案をした。
　真耶の家に戻る頃になって、稔とレネは蝶子とヴィルの様子がいつもと違うのに氣がついた。蝶子はヴィルに対して半端でなくきつい言葉を遣っていた。ここ半年ほど聞いたことがない激しさだった。ヴィルの方は傷つくどころか全く平然として、やはりきつい調子で応戦していた。イタリア時代に戻ったようだった。
　そんな二人を見たのは初めての真耶は怯えたように稔に訊いた。
「あの二人、何かあったの？」
「さあな。ずっと一緒にいたけど、氣づかなかったぞ。でも、あいつらって、もともとあんな感じだったんだぜ。半年くらい前までは」
「なんですって？」
　役割が反対になっちまったけどな。稔は腹の中でつぶやいた。前はテデスコが不要につっかかって、トカゲ女が平然と応戦していたんだ。
　出発が近づいているので、真耶とその家族に頼まれて、四人は園城家の居間で再び演奏をしてみせた。真耶は、蝶子とヴィルの二重奏があまりにもロマンティックで感情にあふれているので再び目を丸くした。先程までけんか腰で会話をしていた二人とは別人のようだった。な、わかるだろ、心配はいらないんだよ、と稔が目配せをした。

（初出　二〇一一年八月　書き下ろし）